

2001 a space odyssey

2001年宇宙の旅

2001: a space odyssey

MGM PRESENTS A STANLEY KUBRICK PRODUCTION

2001年宇宙の旅

MGM映画■CIC配給■1968年度作品■スーパーパナビジョン■メトロカラー

《文部省特選》



★もし，この映画が一度で観客に理解されたら，我々の意図は失敗したことになる。

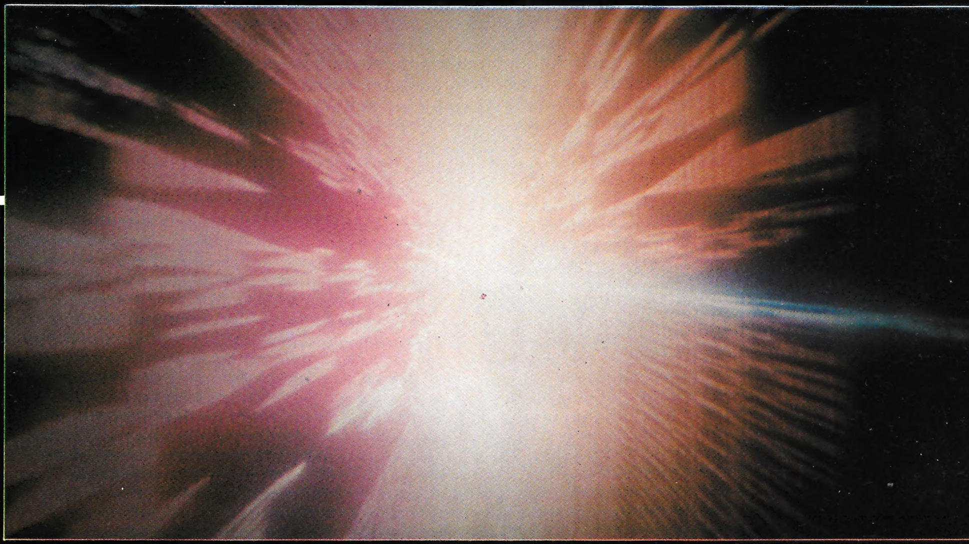
——————アーサー・C・クラーク

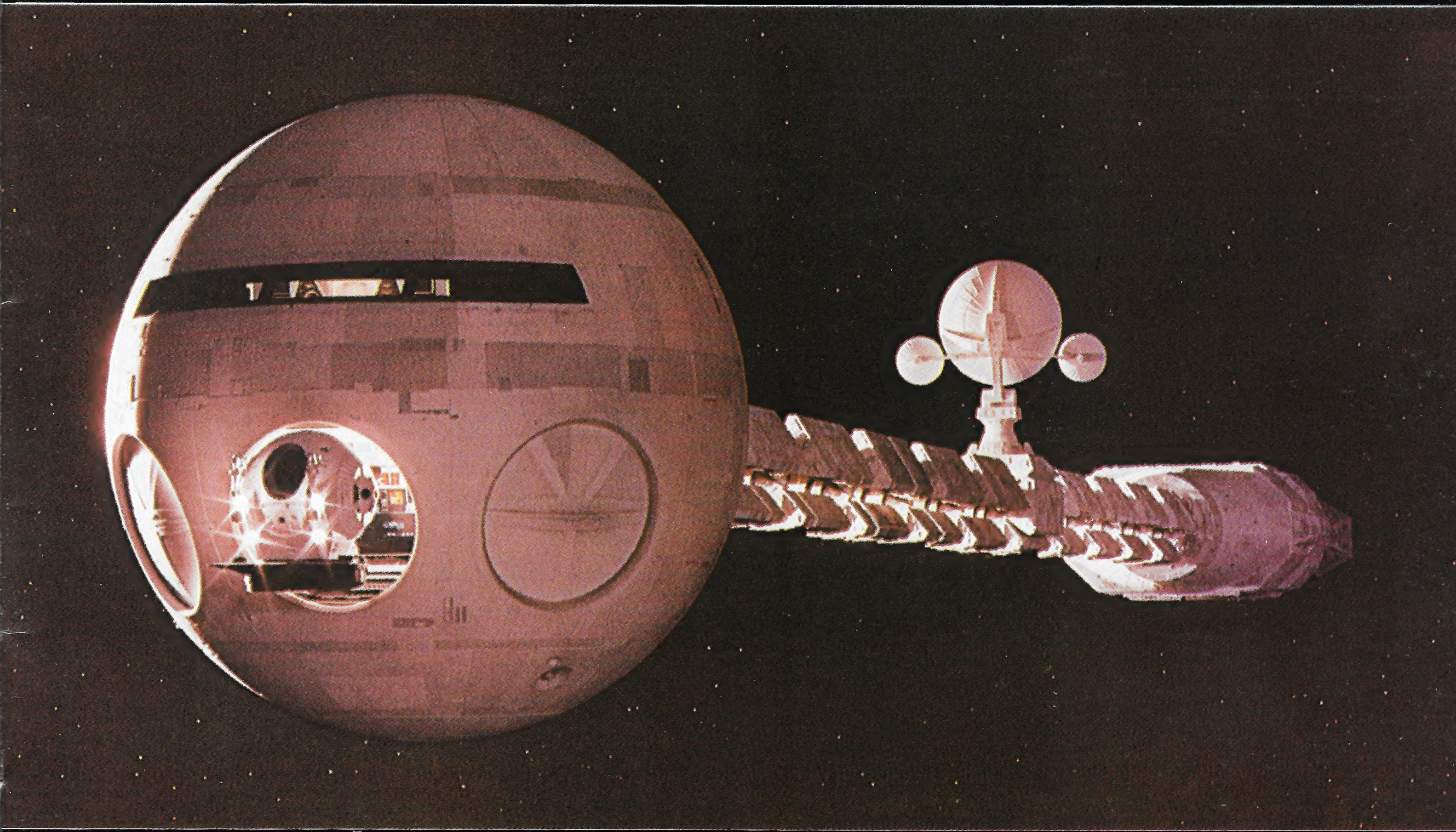
★言葉で説明できない種類のもの，つまり視覚的体験を，見る人の意識の内部へ到達するような強烈な体験を私は創造しようとしたのだ。(製作の意図について) この映画の主題は〝神〟という概念だ。ただし，これまでのような神ではなく，科学的な定義による神なのだ。宇宙の知的存在，生物的進化の最先端としての神である。(作品の主題について) ———スタンリー・キューブリック

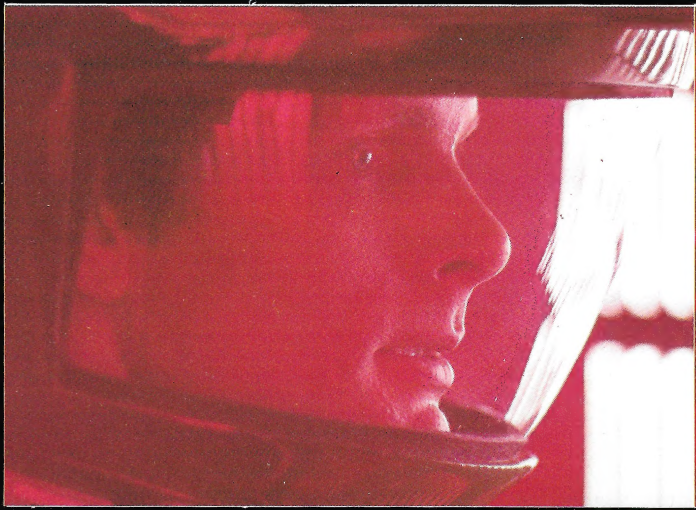
★スタンリー・キューブリックは究極的なＳＦ映画を創った。そして，どんな人でもこれ以上の映画を製作することは非常に困難なことであろう。

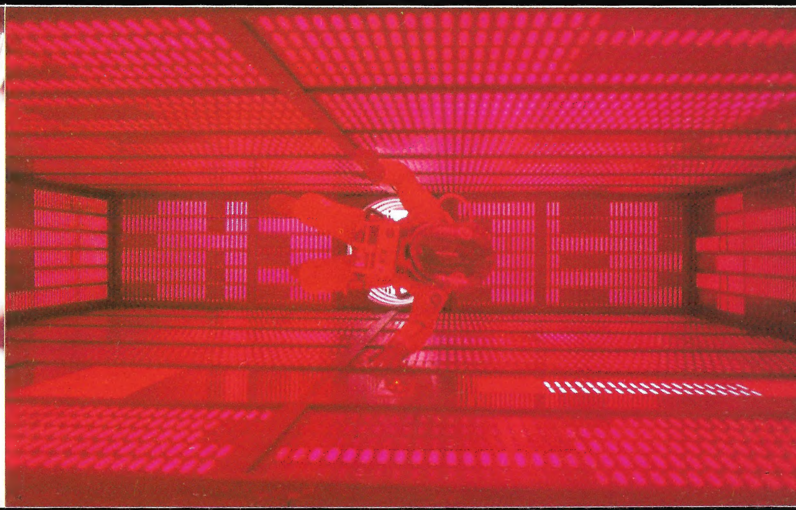
技術的に比較することは出来るが，私は「2001年宇宙の旅」が遙かに優れていると思う。

————「スター・ウォーズ」の監督ジョージ・ルーカス









STORY

今から400万年前，地球には人間の祖先である猿が，小さな群を作って住んでいた。彼らの頭上には大空が広がり，彼らの周囲には広大な原野が続いていた。

ある朝，眠りからさめた彼らは，近くに不思議なものを発見した。それは黒い記念碑のようなもので，原野に端然と立っていた。一体誰が建てたのか,明らかに自然のものと違う幾何学的な形体が，猿たちにも異様に思えたらしく，彼らは遠巻きに眺めていたが，中には，腕を伸ばして，そっとさわってみるものもいた。

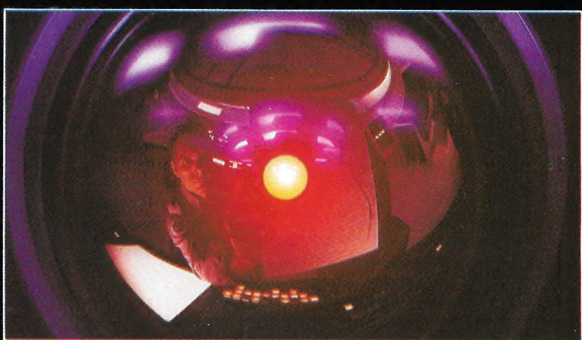
すると，この黒石板が猿たちの進歩を促すかのように，彼らは道具を発見した。

それは，地上に横たわる野獣の骸骨から抜き取った１本の骨に過ぎなかったが，それを握った猿は，前よりずっと強くなり，同族の他のグループに襲われた時には，これを振るって彼らを撃退することができた。

黒石板の手引きで，一たび道具を発見した人間は，進歩の道を突き進んでやまなかった。人間猿が，たわむれに空高くほうり投げた１本の骨は，やがて宇宙船にまで発展し続けたのである。

そして2000年。われわれは，すでに，月に基地や植民地を持ち，地球と月との間には，宇宙ステーション５を中継地として，旅客宇宙船が定期に通っている。

今しも宇宙船オリオン号が，地球から宇宙ステーション目指して飛んで行く。オリオン号は，地球と宇宙ステーション５との間を往復するフェリー・ボートで，

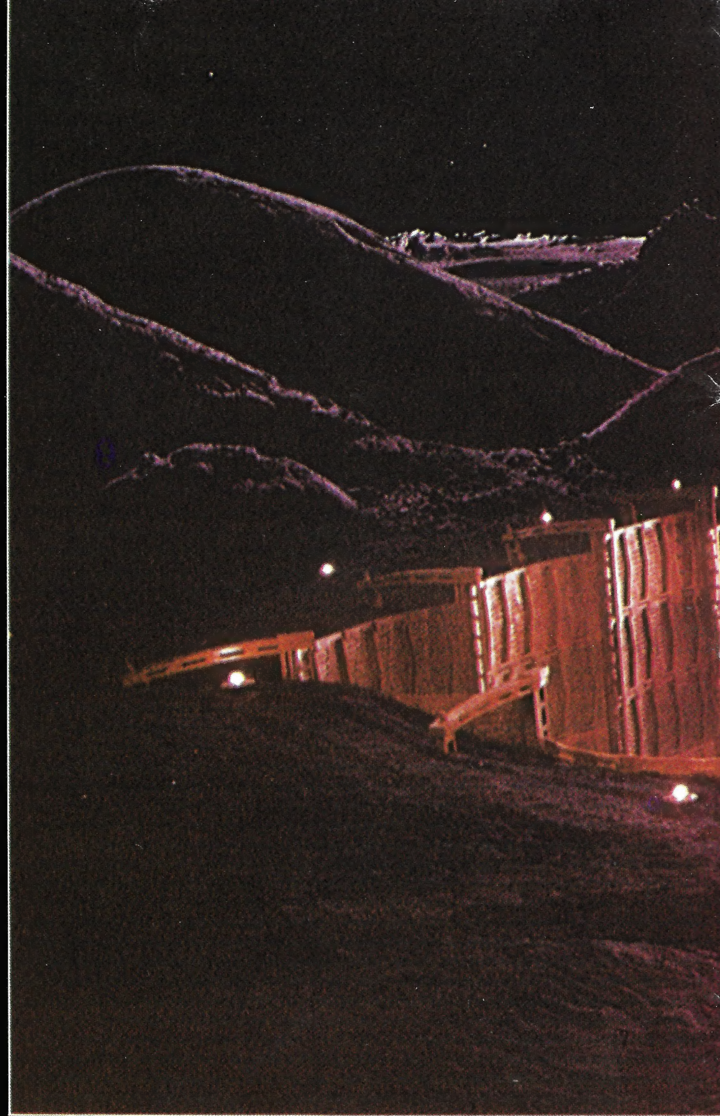


地球の大気圏を通るので翼を持っている。

しかし，こんどの旅では，オリオン号の客はアメリカ宇宙航空局のフロイド博士（ウィリアム・シルベスター）唯一人だ。彼はある秘密の任務で月へ向っているのである。そして，アメリカのケープ・ケネディ空港を飛び立ってから，約１時間で宇宙ステーション５に着いた。

この宇宙ステーションは，赤道の上空を1,800キロの高度で地球を回っている。宇宙で組立てられたもので，車輪のような形をし，ゆっくりと自転している。もともと，ここは無重力だが，回転によって起こる遠心力のおかげで重力感が与えられ，われわれは地球上と同じ状態でいられる。

フロイド博士は，しばらく広いロビーで休憩し，他国の旅行者と話をしたり，テレビ電話で自分の家族と通話したりした後，こんどは，宇宙ステーションと月とを結ぶ宇宙船エアリーズ号で月に向った。そして２



日後には，月のクラビウス火口にある月基地に到着した。

エアリーズ号が，ゆっくり，地上の発着台に着陸すると，発着台は，同船をのせたまま地下の巨大な気密室に下がって行く。そのため，乗客は宇宙服を着ないで地下の基地に降り立つことができる。

このクラビウス基地は，月の南極よりにあるので，地球は沈むことなく，いつも地平線の少し上空に，満月の50倍以上もの明るさで輝いている。

フロイド博士は，基地の科学者たちと会議を持った後，彼らと一緒に，ムーン・バスで，ここの北方にあるティコ火口に向





った。

博士の秘密の任務というのは，ティコ火口で掘り出された不思議な物体を調査することだった。

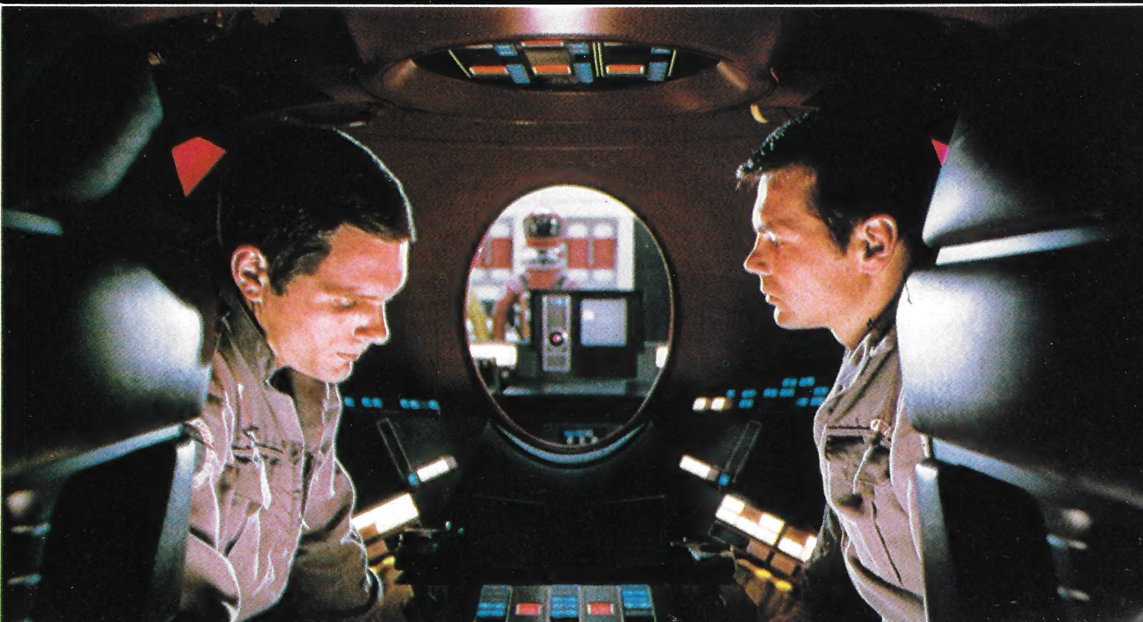
博士たちが発掘現場で見たのは，例の黒石板だった。400万年前，人間がまだ地上に現われなかった頃，地球を訪れた宇宙の何者かが月にも現われて，名刺代りにこの記念物を残して行ったのだ。

21世紀の科学者たちは，かつての猿のように，黒石板の前に立って，じっとそれを見つめていた。中にはそっと手を伸ばして，それに触れてみる者もあった。

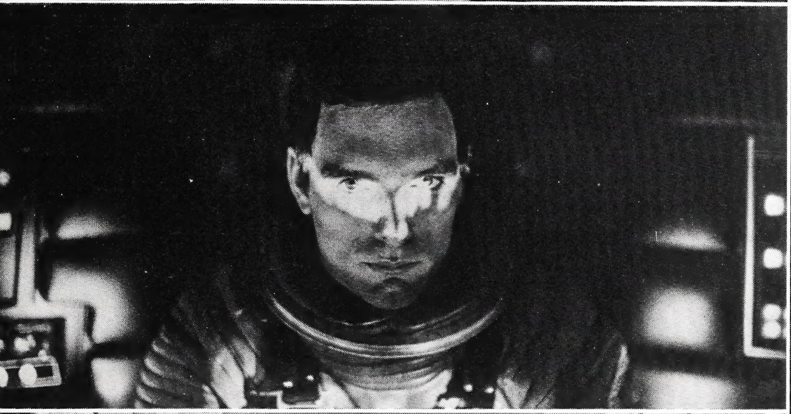
黒石板は，木星の方向に絶えず強力な電波シグナルを送っていた。これが発掘されたのも，その電波のためだった。やがて夜明けの太陽の光が，黒石板の頂上をかすめた瞬間，かん高い金属音が鳴り響いて，科学者たちは思わず耳をおさえ，その場に居たたまれない思いにかられた。

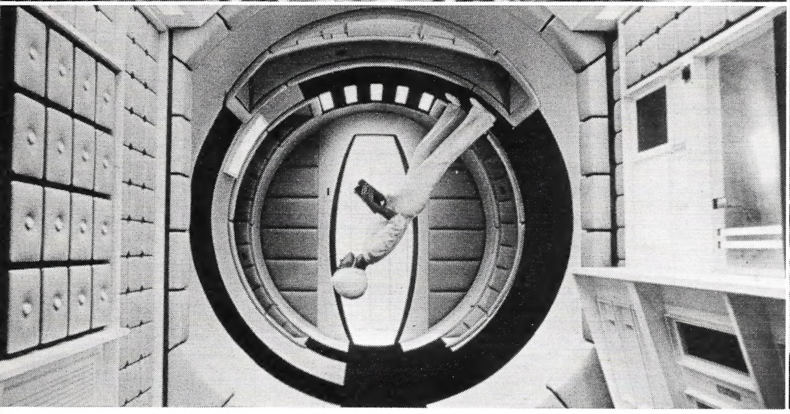
宇宙のある生物がここに黒石板を建てたもので，電波シグナルが送られる先に彼らがいる。これが科学者たちの結論だった。そして14ヵ月後，黒石板の謎をとくため，原子力宇宙探険船ディスカバリー号が，地球から8億キロ離れた木星に向って飛びたった。

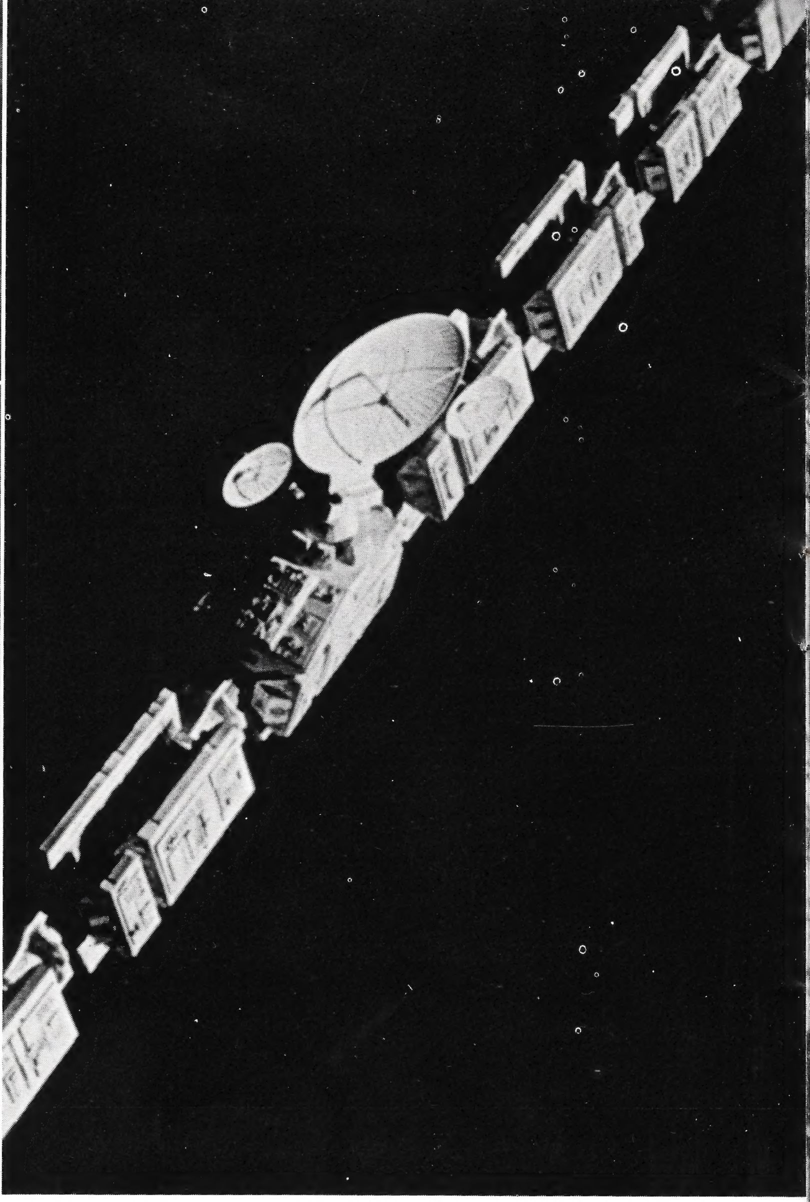












宇宙探険船ディスカバリー号は，長さが 210 メートル。先端が球形で，その上部半分にコントロール室，乗組員の居室などがあり，宇宙ステーションと同じように，ゆるやかに回転して重力感を作り出している。球体の下半分は格納庫で，一人乗り宇宙艇が数台格納されている。宇宙艇は，調査や修理のため本船の外に出る時に用いられ，作業用のマジック・ハンドを持っている小型の宇宙船である。

宇宙探険船ディスカバリー号には，五人の科学者が乗組んでいた。うち三人は，目的地に着いて彼らの手が必要になるまで，人工冬眠カプセルの中で眠っていた。脈拍も呼吸もゼロに近い状態なので，酸素，食料，エネルギーが節約できる。したがって，船内で活動しているのは，隊長のボウマン博士（キア・デュリア）とプール博士（ゲイリー・ロックウッド）の二人だった。

彼らのほかに，もう一人，最も活動的な乗組員がいた。コンピューターＨＡＬ9000だ。これは最高度のコンピューターで，時には過ちをおかす人間に代って，宇宙船の隅々まで監視していた。少しでも異常があれば，修正修理など適当な処置を，即座に，適確に指示する役目を一手に引き受けていた。しかも，自由に会話ができ，思考力や感情さえ持つスーパーマンのようなコンピューターだった。

ディスカバリー号が木星を目差して順調な旅を続けている時，ＨＡＬ9000は恐ろしいことを思い立った。

ある時，ＨＡＬは，突然，アンテナに不調な所ができ，やがて完全な故障になるだろう，と言い出した。このアンテナは，地球と絶えず連絡を保つために必要なもので，船外にあった。

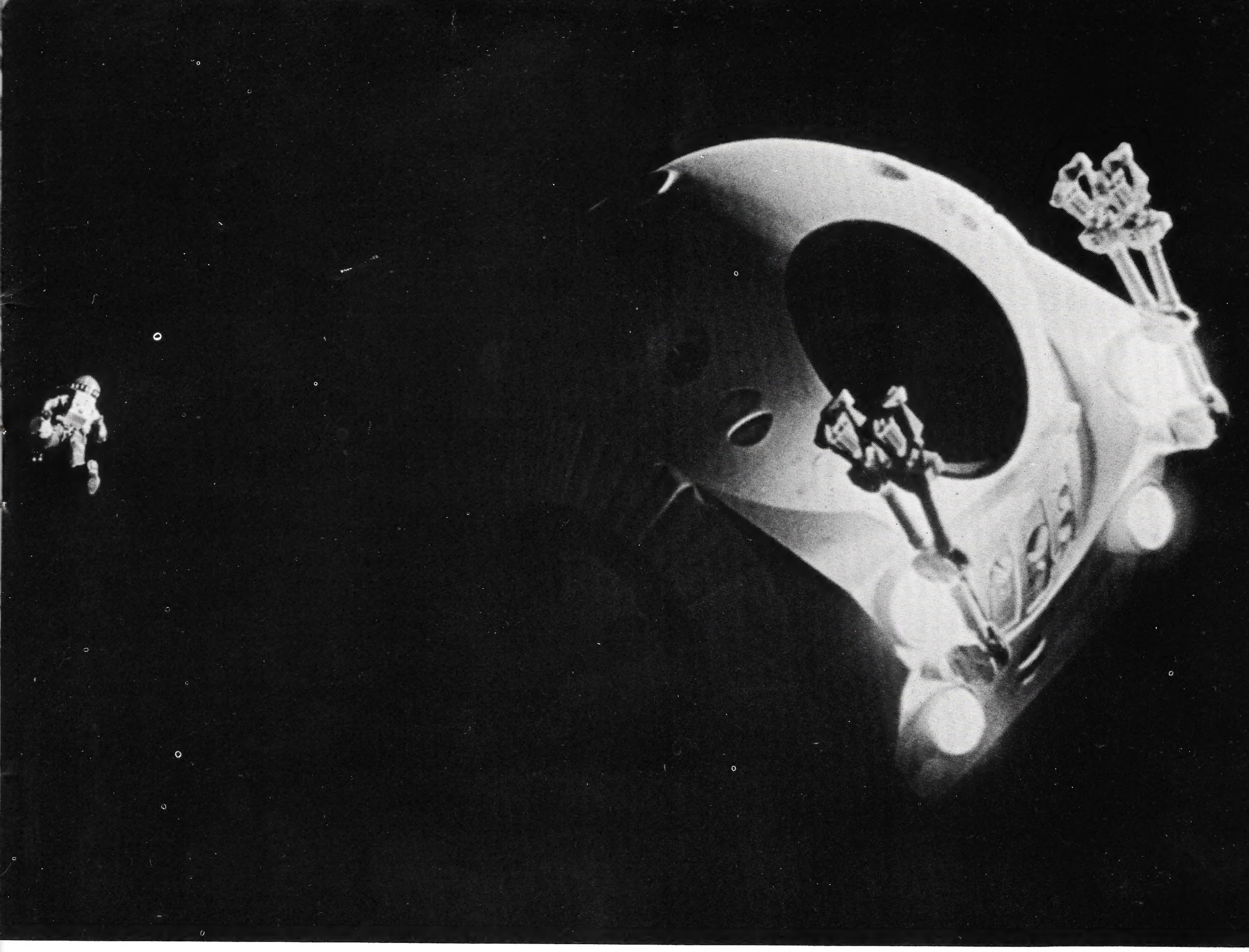
そこで，プール博士は，一人乗り宇宙艇でディスカバリー号の外に出て，ＨＡＬの指示通り，アンテナの部品を取り替えた。だが検査の結果，部品に狂いのないことがわかった。

ＨＡＬの機能に不審を抱いたボウマンは，彼に聞こえないように宇宙艇内でプールと意見を述べ合ったが，万能のＨＡＬは，読唇術で彼らの話を読み取り，危険な反抗に出た。

ＨＡＬは，再びアンテナの調整方法を指示し，宇宙艇で再び本船外に出たプール博士を，宇宙の真空の中におびき出して命綱を切ってしまった。

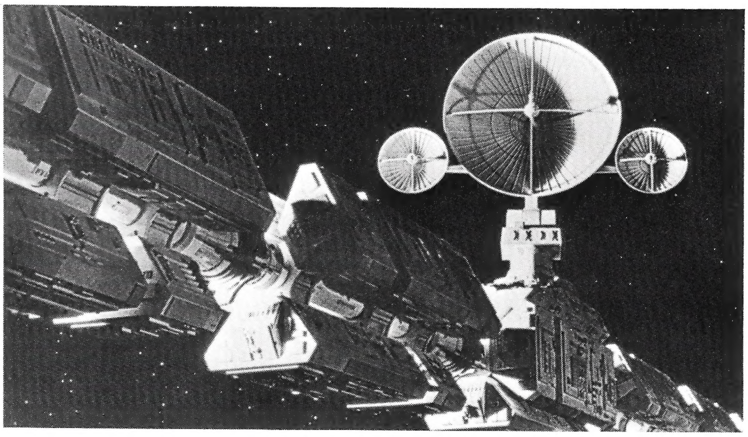
僚友が流れ去るのを見て，ボウマン博士はすぐ宇宙艇でそのあとを追い，マジック・ハンドで彼をつかまえて，本船内に収容しようとしたが，ＨＡＬは格納庫の扉を固く閉ざして，ボウマンをも船内に入れようとしなかった。そこで，彼は非常手段を用いて船内に押し入った。船内では，冬眠中の三人も，すでに死んでいた。

ボウマンは，ＨＡＬの電子頭脳室に入り，彼の哀願をきかず，航行に必要な機能だけを残して他は全部停止した。今やＨＡＬは，完全に，航行に必要な機械となってしまった。



ただ一人生き残ったボウマンは，そのまま航行を続け，やがて，地球の1,000倍もある巨大な木星の軌道に入った時,木星が従えた数個の衛星の間に，大きな黒石坂が浮いているのを発見した。

ボウマンは，宙宇艇でその方に進んで行くうち，突然，宇宙の急流にはまって押し流されるかのように，恐ろしいスピードで，大星団の中を突切り，全く違った時間と空間の次元に突入して行った。そこは，人間の知識も技術も理解力も何もかも役にたたない不思議な領域だった。また，現在の生身の人間の耐えうる限界を遥かに越えた世界だった。



ボウマンが，ふとわれに返った時，彼は，ルイ16世時代の古風で優雅な部屋の中に立っていた。しかも不思議なことに，広いその部屋の中に，唯一人，静かに住んでいる自分自身を発見した。

そこは，地球の人間に知力と進歩を与え，ボウマンを黒石坂の謎で招き寄せた，宇宙の全知全能の力が，彼のために用意したある星の上なのか，それとも彼の古巣の地球なのか，彼にもわからなかった。

その部屋は，優雅な家具や装飾にもかかわらず，実験室の檻の中のように寒々として，生気も人間くささもなかった。その中で，ボウマンは次第に老い果てて行った。そして今は，その運命のすべてを肯定するかのように，静かにベッドに横たわっていた。その傍らには，彼の生涯を象徴するかのように，宇宙艇と黒石板が立っていた。

彼は静かに手をあげ，それらに最後の挨拶をした。するとまたしても黒石板の奇跡が現われた。彼は，死の同じベッドで胎児としてよみがえった。

それは，太陽系宇宙の果てをきわめ，宇宙の絶対の力に出会った経験と知恵とを，そのままそっくり体内に貯え，そこから出発することができる一段高いレベルの人間への飛躍でもあった。

胎児は，地球を眺め，宇宙を眺めて，やがて世に出る日を，じっと待っているのだった。

映像と言葉の接点より

伊藤典夫

映画「2001年宇宙の旅」が初公開にさいしてまいた話題は，あれから10年と半年が過ぎた今も，まだ記憶に新しい。物価の安かった当時としては空前の製作費をかけたＳＦ大作。製作・監督が，アメリカ映画界でも指折りの個性派にして完全主義者であるスタンリー・キューブリック。それだけでも大事だというのに，ぼくのようなＳＦファンの興味をとりわけかきたてたのは，ＳＦの巨匠アーサー・Ｃ・クラークが，脚本の共同執筆も含めて全面的に協力していることだった。

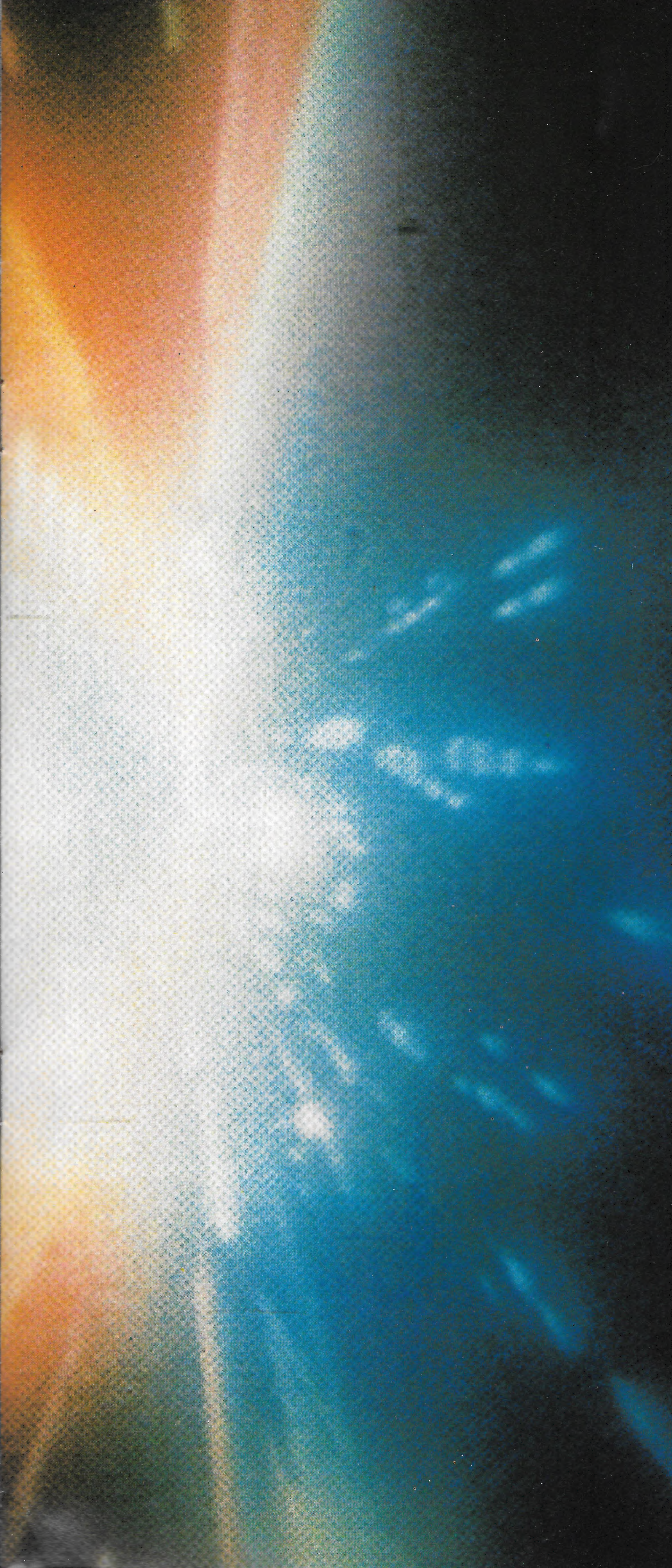
現実にはない世界を描くＳＦは，言葉ならまだしも，映像で表現するのはきわめてむずかしい。架空の世界に迫真性を持たせようとすればするほど経費がかさむし，そうでなくても人間的なドラマとは別のところに魅力のあることが多いＳＦでは，不特定多数の観客を動員しにくい負目がある。従来のＳＦ映画の90パーセント以上がつまずいてきたのは，その二つの点だった。ところがキューブリックは，こともあろうに，リアルでマクロな視点から科学性の強い，または夢幻的な作品を書くクラークを起用し，彼の小説世界を視覚化する気なのだ。ぼくが待ちかねて劇場にかけつけたのは言うまでもない。

以後の騒ぎは，当時映画をごらんにならなかった方も，さまざまな出版物を通じてご存知と思う。「2001年」は，ＳＦの豊かなイメージ世界を，それまで予想もされなかった精度で描きだ



すとともに，説明をいっさい排した暗示的なストーリー展開で賛否両論に分れた議論を，日本のみならず世界中に巻きおこした。正直な話，ぼく自身途方に暮れて劇場から出てきた口である。一つには，ぼくの期待に反し，それがクラークの映画ではなかったことにもよるだろう。本来キューブリックの映画なのだから，当然といえば当然の話なのだが，それがのみこめてきたのは１回では飽きたりず，４回，５回とくりかえし見るようになってからである。それほど魅力にとみ，しかも謎めいた映画だったのだ。

わが国では，はじめの騒ぎがいったん鎮静すると，内容の取っつきにくさも手伝って，忘れられた形になった。「2001年」が



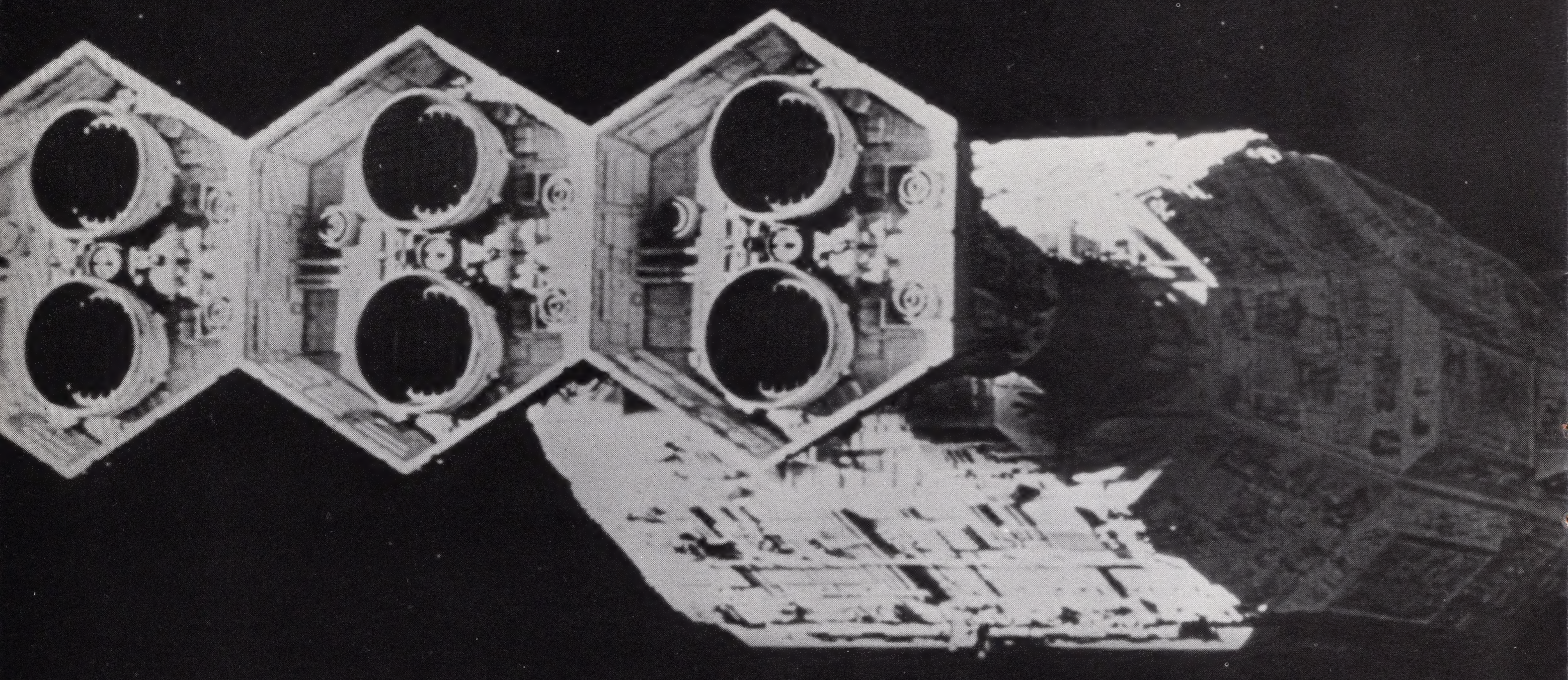
その奇妙な底力を発揮するのは，それからである。べつに映画に限らずどんな分野においても，話題性が評価に先行したような作品は，忘れられる率が大きい。ところが「2001年」は珍しい例外となり，欧米では客足が落ちるどころか，映画史上に残る一つの金字塔としてますます多くの観客を動員するようになったのだ。人類の月着陸は，この映画の封切から1年あまり後の，1969年7月21日。この事実もまた「2001年」再評価の傾向と無縁ではないだろう。時代を先取りする巨大なテーマと取り組み，観客の無理解をおそれず映像美を追求するキューブリックの執念がついに実を結んだわけだ。

しかし映画「2001年」は，はじめぼくらが思ったほど判りにくい映画なのだろうか。先にも書いたように，この映画の脚本はキューブリックとクラークの合作になるもので，その意味ではクラークの考えは，十分ではないにしても，かなり盛りこまれているはずである。しかしクラークの映画ではなかった，とぼくが書いたように，完成した作品はあくまでキューブリックの意図につらぬかれたものだった。(2001年)－(クラーク)＝（キューブリック）という計算は，強引すぎる気もしないではないが，少なくとも初期にあったクラークの思惑に何が加えられ何が削られたかを考えることによって，キューブリックがめざしたものの輪郭はおぼろげにわかるはずである。

キューブリックはあるインタビューでこう語っている。「ＳＦをよく読んではいたが，熱烈なファンだったわけじゃない。宇宙には，高度な文明や進化した生命がいくらもあるかもしれないという可能性に惹かれたんだね。アーサー・クラークの小説には前から感心していたから，進歩した地球外文明についてのぼくの興味を一つの物語にふくらまそうと考えたとき，ＳＦ作家の中でもっとも才能に恵まれている彼をおいてパートナーはいないと思った。それに彼には科学的教養と広い知識があるから，なおさら適当なわけだ」

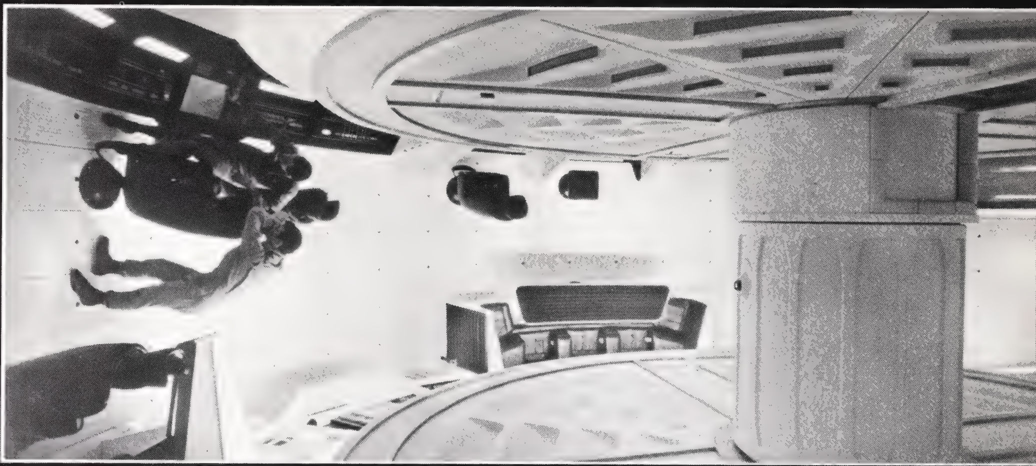
こうしてクラークが招かれ，1951年に彼の発表した「前哨」という短編小説が映画の土台に使われることになった。

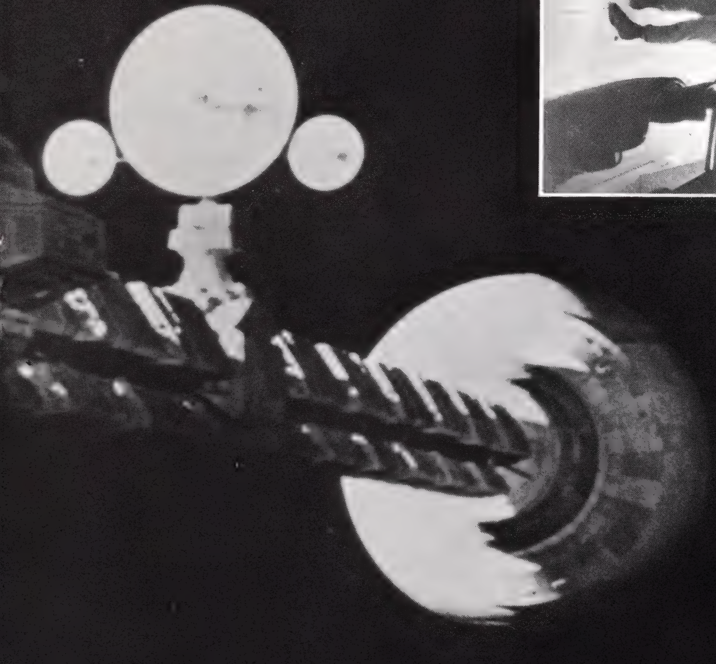
1996年，人類が月に基地を設けてしばらく後，月面の高い山の異常に平坦な頂きに，ふしぎな物体が発見される。高さは人間の身長のほぼ2倍，おおよそピラミッド形をした多面体の光輝く建造物で，はじめは月に文明があった証拠と考えられるが，正確な年代が測定された結果，地球に生命が発生する以前のものとわかる。しかし物体が何かの装置であることまでは明らかになったものの，それ以上くわしい調査はできない。なぜなら物体の周囲には，目に見えぬドーム形の力場があって，侵入するものをかたく拒んでいるからだ。人びとはこの謎の物体に手をこまねき，つい

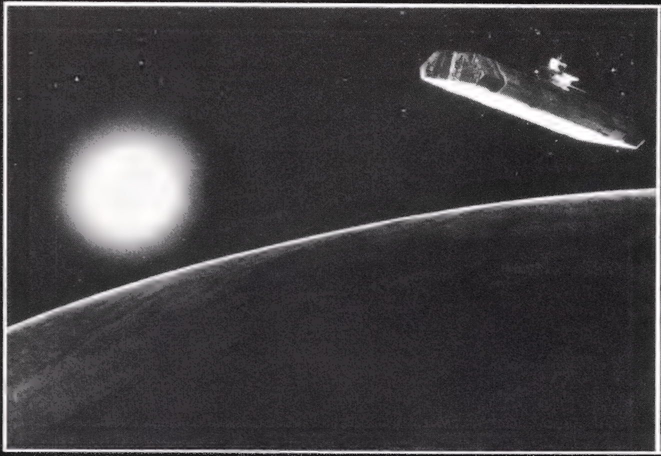


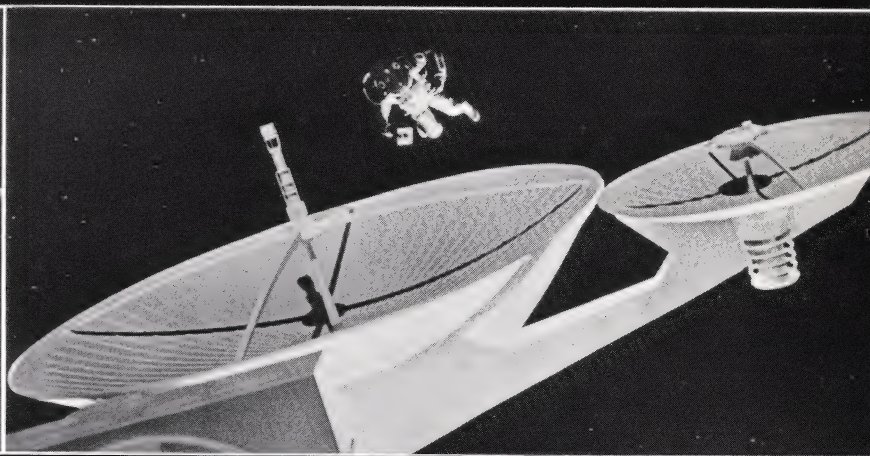
には原子力を使って破壊してしまう。
あのピラミッドは何だったのか。一つの推論は成立つ。もしかしたら，あれは高度な生命が月に残していった信号機だったのではないか。宇宙をさまよい，同胞をさがし求める生物が，地球にいつか知性が芽ばえることを見通し，その時を知るためにおいていった装置ではないのか。それが月にあった理由は一つ──地球を離れて宇宙にとびだすことこそ，人類が進化するに足る種族になったあかしだからだ。
自分はまだ発見されていない，という信号を辛抱強く宇宙の彼方に送りつづけていた装置は，いまや破壊された。人類は，たとえていえば火災警報を鳴らしてしまったことになる。はるかな宇宙の深淵から何者がやってくるにしろ，その日はおそらく間近に迫っているにちがいない……。

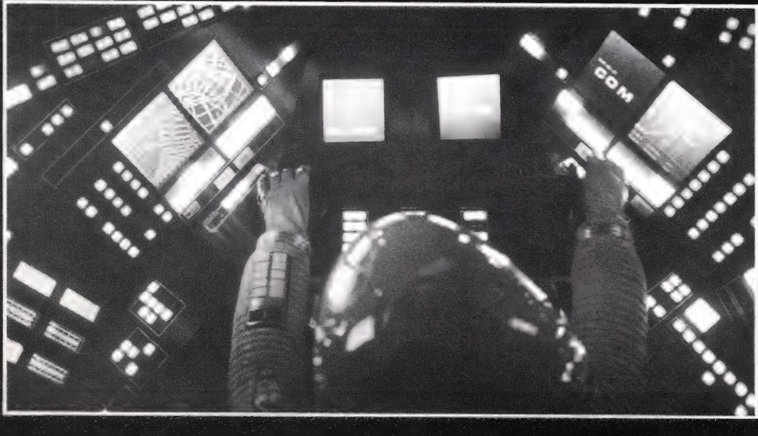
キューブリックとクラークは，これをもとに散文的なシナリオを書いていった。キューブリックはいう，「ぼくらが書いたのは，あの映画を説明した長い散文といっていい。……はじめにできあがったのは，どちらかといえば長編小説に似た5万語の作品だった」おそらくこれが，映画公開に合わせて，クラークの名前だけで出版された同題の長編小説の前身にあたるものだろう。しかし小説版は，完成された映画と比べると，（さすがはクラークというべきか）いかにも説明的で，一つの解釈以外は許さない。それが映画では，なぜこのような形にならざるを得なかったのか。
以下はぼくの当て推量だが，ＳＦはそれが特に小説の場合，きわめて理屈っぽくなることがある。日常世界から飛躍したできごとに説得力を持たせるため，ときには物語の主人公が知るはずのない事実までが，作者によって説明され，物語が構築されていくのだ。しかし同じことを映画でやったらどうなるか。おそらく一度聞いただけではとても頭に入らないナレーションで全編が埋まってしまうか，さもなければ，10時間かけても終らない映画になってしまうだろう。キューブリックは，製作の過程で，ＳＦにおける映画と小説のちがいをますます意識していったにちがいない。少なくとも撮影段階で，はじめの脚本にあった会話やナレーションがどんどん省略され，映像と音響効果を前面に押しだす方法がとられたことは確かである。
キューブリックはいう，「あの映画は，言葉におきかえられないメッセージなんだ。言語によらない体験なんだよ。2時間半の上映時間のあいだ，会話は40分足らずしかない。言葉の陥穽に落ちこまない，視覚的な体験をつくりあげようとした。その感情的な，哲学的な内容が直接意識下にしみとおるような。あの映画が成功したとすれば，それは，人間の運命とか，宇宙における人間の役割とか，より高等な生物と人間との関係などについてあまり考えたことのない人びとの層にまでアピールしたことだと思う。あれの哲学的な意味や象徴的な意味は，観客が自由に考えればいい」
しかし，それにしても，である。「2001年」の結末──キューブリックはここで何を描こうとしたのか。それはクラークの次のような言葉が手がかりになるだろう。「テクノロジイが申し分ない発達を遂げれば，それは魔法と見分けがつかなくなる。また，申し分なく進化した生物がいるとすれば，彼らは神と見分けがつかないだろう」
宇宙飛行士ボウマンが宇宙の彼方で遭遇したものとは，高度なテクノロジイを持つ高度に進化した生物，すなわち全能に近い力を持つ神なのだ。神の意図を推し計ろうとするほど愚かなことはあるまい。





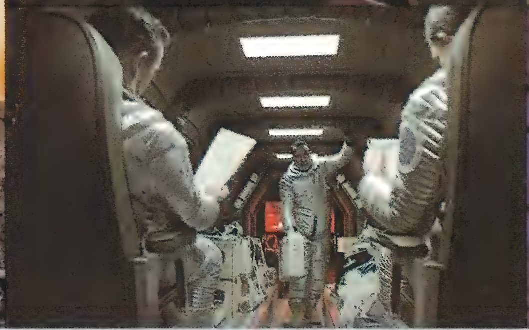





COM













2001: a space odyssey

MGM PRESENTS A STANLEY KUBRICK PRODUCTION



未来の宇宙飛行士ボウマンを演じたキア・デュリアは二つの点で大きく成長した。一つはキューブリックの映画に出演できた事。もう一つは彼が今まで一度も経験した事のないまったく新しい映画の主役を演じた事だ。

彼は『リサの瞳の中に』で演じた，不安におののき，異常な神経を持った青年の役の好演により，色々な映画会社から出演の申し込みをうけたが，そのどれもが異常で不安におののく青年の役ばかりだった。

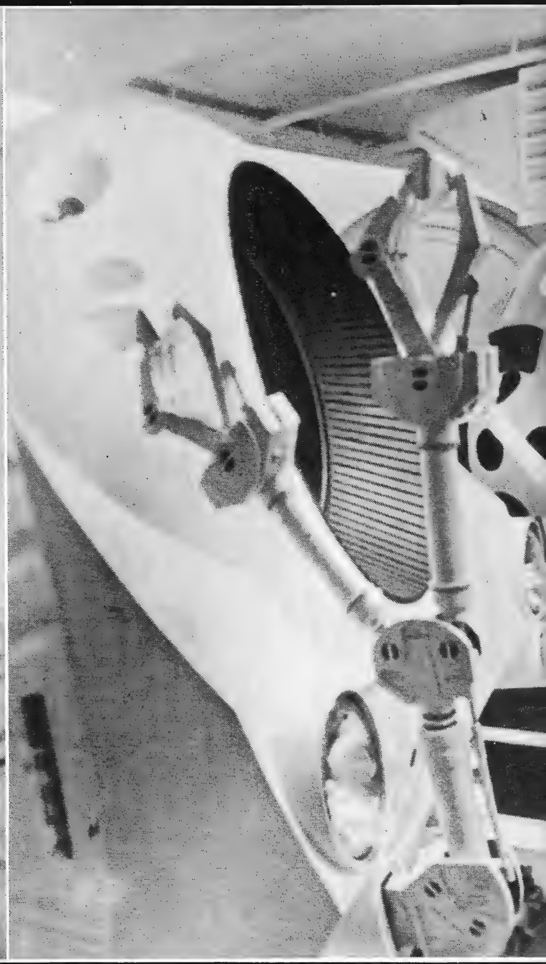
その結果，デュリアはキューブリックから今までのデビッドのイメージとはまったく違う役を持込まれた時は当惑してしまった。

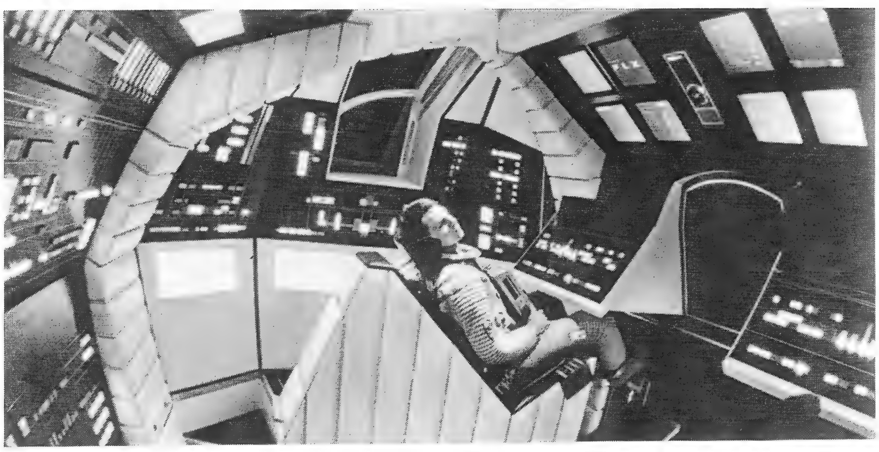
今までと違いボウマン役でデュリアは背が高く，ある意味では鈍重で，堂々として，二つの博士号を持ち，宇宙飛行士でパイロット，一言でいえば宇宙時代（2001年）が作り出した新しい型の人間の役を見事に演じている。

1939年，オハイオ州・クリーブランドに生まれ，3歳の時両親と共にニューヨークに移って来たため，自身の事を準ニューヨークっ子と思っている。

主な出演作品「リサの瞳の中に」㉝「濡れた本能」「モンタナの西」「大突撃」㉞「母の旅路」「バニー・レークは行方不明」㉟「女狐」㊲「異常な快楽」㊴「続・フレンズ」㊹







GARY LOCKWOOD
ゲイリー・ロックウッド
（プール操縦士）

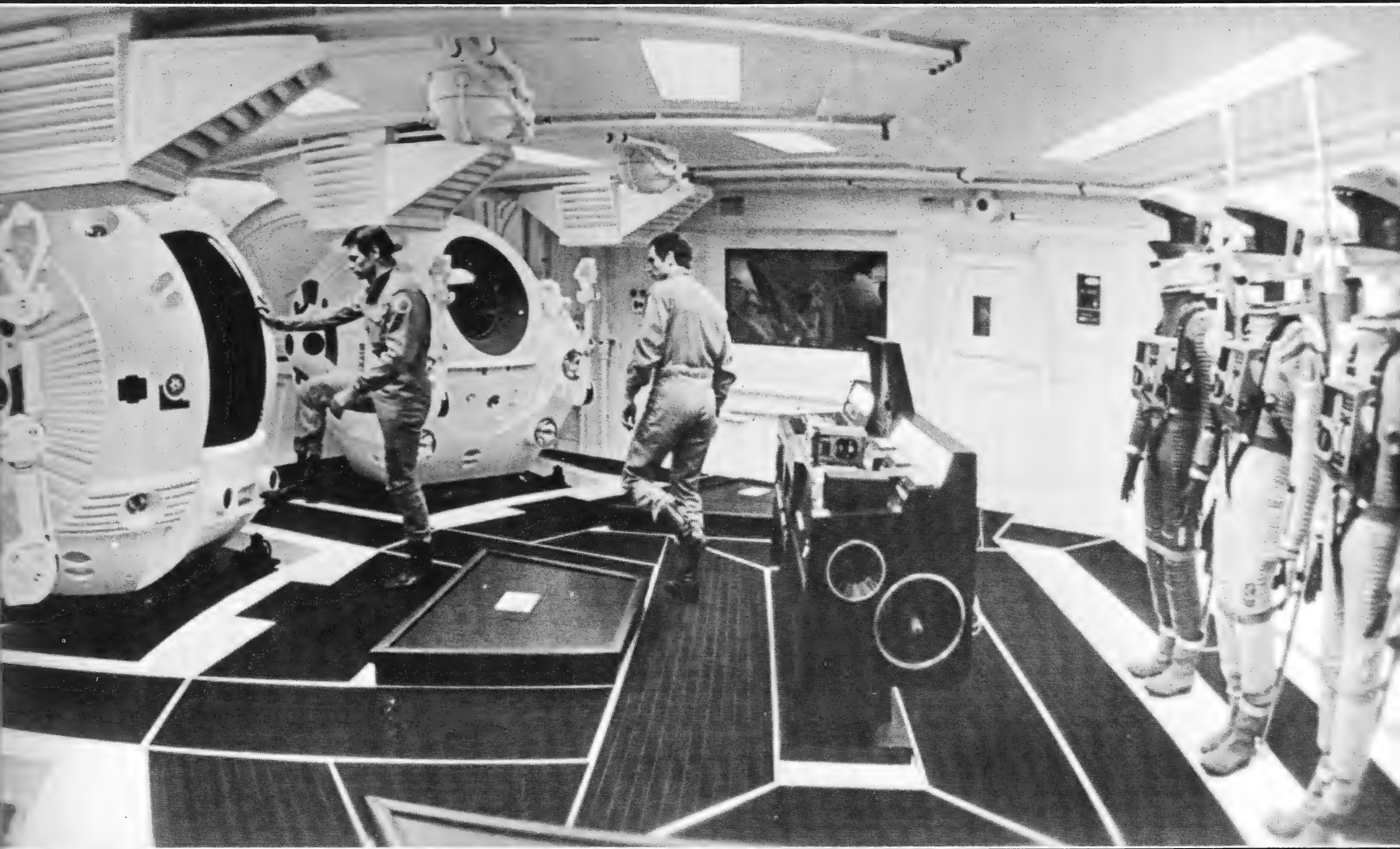


KEIR DULLEA

キア・デュリア
（ボウマン船長）







テレビの“陽気な中尉さん”（THE LEUTENANT）シリーズを始める前，実際の海兵隊中尉の日常がどの様なものであるかを見学するため，ゲイリー・ロックウッドは約３週間をクワンティコにある海兵隊のベースで過した。彼は本物の中尉がどの様に歩き，話し，又，振舞うかを知りたかったのだ。

しかし，この正確を期するための見学旅行もこの『2001年宇宙の旅』のプール隊員に関する限り不可能だった。

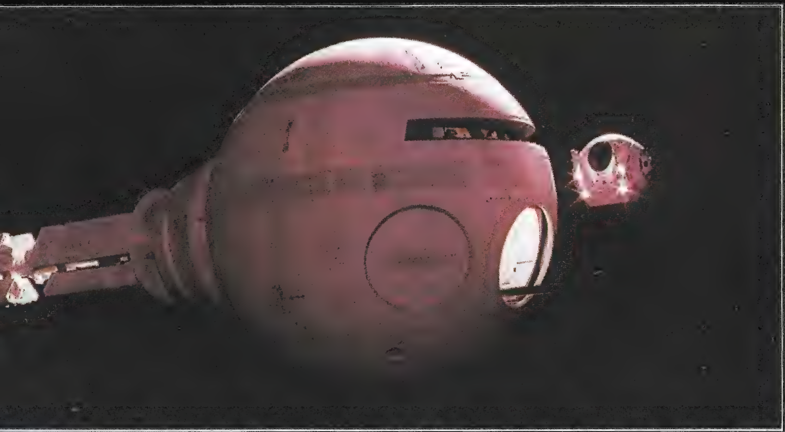
この映画に出て来る様な，大学教授二人分の学識があり，プロ・フットボールのラインバックと同じくらいの体とスタミナをもったスーパー宇宙飛行士など，未だ存在しなかったからだ。

この映画のプール隊員の役作りには，テレビでの永年の経験，『そこには娘がいた』（THERE WAS A LITTLE GIRL）でのブロードウェイでの舞台，『草原の輝き』などの映画出演で得た演技力が役に立った。

『2001年宇宙の旅』では強じんな肉体をもったプール隊員の役だが，実際にもロックウッドは恵まれた肉体を持っている。背の高さは6フィート。がっしりした体軀の持主で，ＵＣＬＡ（南カ大学）時代はフットボールの選手をし，映画界での最初はスタントマンであった。

主な出演作品「のっぽ物語」㊾「草原の輝き」「嵐の季節」「魔法の剣」㊿「ヤング・ヤング・パレード」63「裏切り部隊」64「ファイヤークリークの決闘」67「ラスベガス強奪作戦」68







“2001年宇宙の旅”の特殊撮影

井 口 健 二

この映画が最初に公開された10年前に，もしこの原稿を依頼されていたら，私は大いにとまどったことだろう。この映画には実に多彩な特殊撮影が使われている。ところが当時の私には，それがどのようにして創られたのか，皆目見当がつかなかったのだ。

もちろん撮影方法が予想できたものもあった。当時の雑誌などにも解説が載ったりしている。しかしその予想のほとんどは，全くの見当はずれであったのだ。

後になって，当時のスタッフへのインタビュー記事や，研究書などが発表され，ようやくこの映画の特殊撮影の全貌が知られてきた。そしてそれは，私達の予想をはるかに越えた，驚異的なものだったのである。

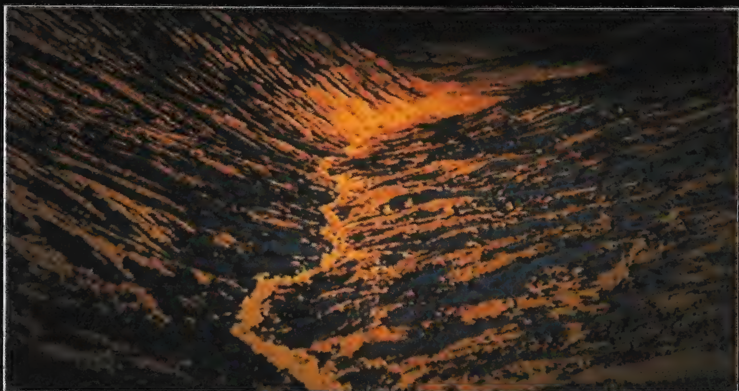
当時弱冠24歳で特撮スタッフに参加，最近の『未知との遭遇』でも素晴しい特撮を見せてくれたダグラス・トランブルは，当時の模様を，「それはまるで物理の実験室のようだった」と語っている。製作費を湯水のように使い，完全なものができるまで試行錯誤を繰り返していったこの映画のスタッフ達の姿は，



科学者の一徹さにも似ているのだ。

この映画で使われた数多くの特殊撮影の中から重要なものをいくつか，ピックアップして紹介しよう。

まず“人類の夜明け”の猿達のシーンにはフロントプロジェクションと呼ばれる，おそらくこの映画で始めて実用化されたシステムが使われている。これは，俳優達のうしろにスクリーンを立て，これに別撮影された風景などを投影し，この投影された画面と俳優達とを同時に撮影してしまうというもので，従来からあるスクリーンプロセスというシステムによく似ている。



しかし従来のスクリーンプロセス（特にリアプロジェクションと呼ぶこともある）が，半透明のスクリーンを用いて，俳優やカメラとは反対の側から投影していたのに対して，フロントプロジェクションでは俳優やカメラと同じ側から投影するのが特徴だ。こうすれば，映像が半透明のスクリーンを透過する場合に比べて，格段にきれいな映像を得ることができる。

ところが俳優と同じ側から投影を行うと，当然スクリーン上に俳優の影が写ってしまう。

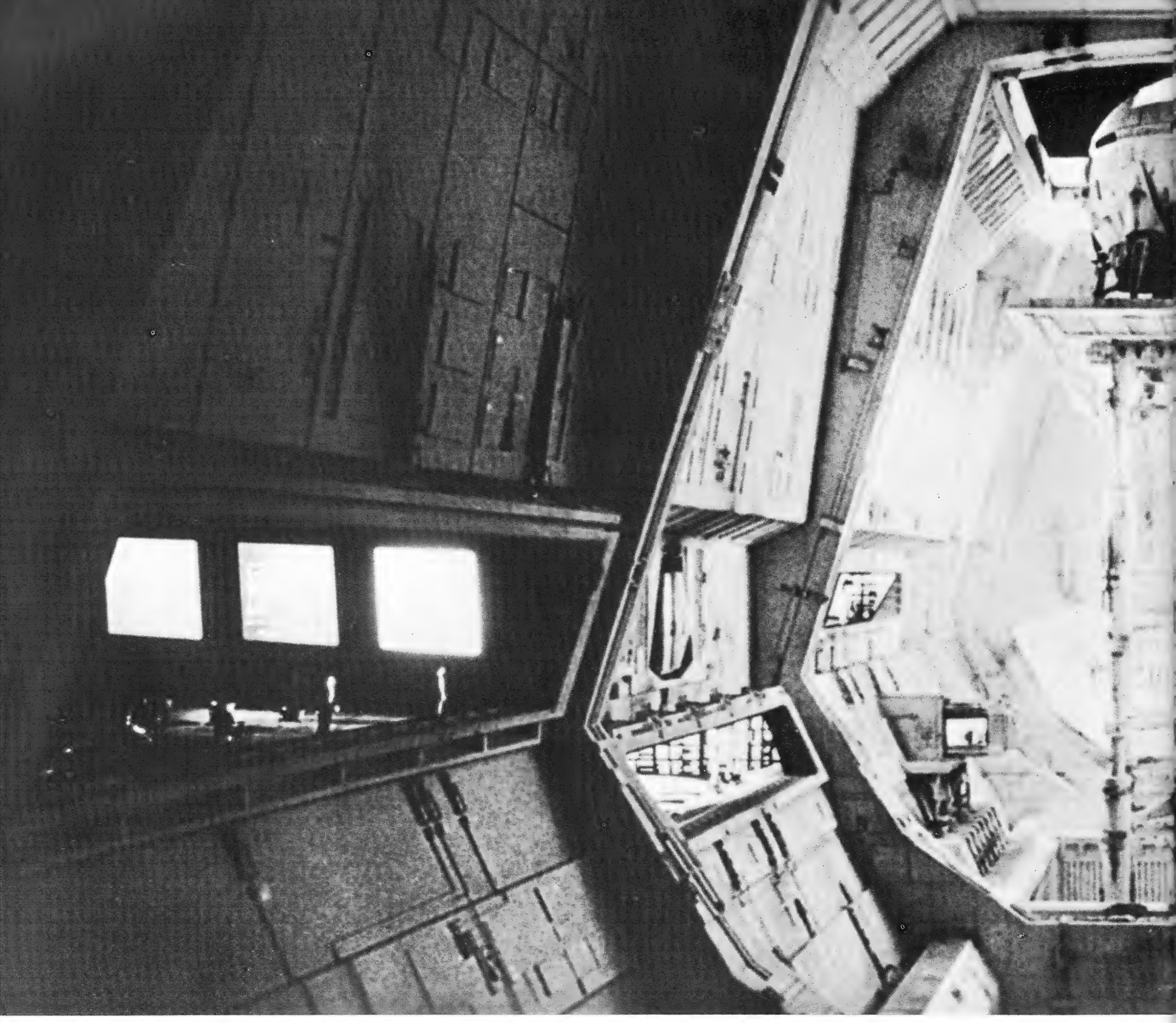
そこでどうするかというと，カメラのレンズの方向と映写機の光の方向とを完全に一致させる。こうすれば，俳優の影はその俳優自身によって隠されてしまうというわけ。なおレンズの方向と光の方向とを一致させるには，レンズの前に斜めにハーフミラーを置き，これに横側から映写機の光を反射させる方法が使われている。

この映画以後，多くの映画にこのシステムが使われたが，レンズの方向と光の方向とのちょっとしたズレで大きく影が写ってしまったりで，なかなか成功した例を見ない。最近では「未知との遭遇」が唯一の成功例だ。

宇宙船などの窓に現われる人影はほとんどがリアプロジェクションで内側から投影されたものだ。

しかしその中の月面を飛ぶムーンバスのシーンには，おそろしく手間のかかる特撮が使われたシーンがある。それはティコクレータに向う途中のムーンバスが画面の中央奥から手前に飛んでくると同時に，窓の中でフロイト博士らが地図を拡げているのが見えるシーンだ。

このシーンの撮影では，まず10メートル程の長いウォームギアの先端にムーンバスの模型が取り付けられ，このウォームギアを正確なシンクロモータで駆動して，ムーンバスの模型が繰り返し全く同じ所を動くようにする。この装置を月面のミニチュアセットの中に置き，ムーンバスの窓の部分に黒のベルベットの布を貼り付けた状態で１度度目の撮影を行う。そして撮影が終ったらフィルムを巻き戻し今度はムーンバスの窓の部分に白い紙を貼り，他の部分を黒の



ベルベットで被い，白い紙の部分に別で撮影した船内のシーンを投影しながら2度目の撮影を行う。

こうすれば，1回目の撮影のときは窓の部分だけが感光しておらず，2回目の撮影で船内シーンがそこに焼き込まれるというわけだ。

さらにこのシーンでは，暗い月面で，しかもパンフォーカスで撮影するために，1コマの露光時間を極端に長くし，1コマの撮影に10数秒から1分近くかけたといわれている。

月面に向う宇宙船の中で，宇宙食を持ったスチュアーデスが逆さまになるシーンは，回転するセットにカメラを取り付け，スチュアーデスの動きに合せて，セットとカメラの方を逆さまにして撮影したものだ。この程度なら『ザッツ・エンターテイメント』の中にでてきたフレッド・アステアのダンスシーンにも使われていた。

しかしこれがディスカバリー号の船内シーンのように巨大なものになると，ちょっとびっくりする。このセットは直径が38フィート，幅が10フィートであった。しかもこのシーンの撮影では俳優以外の人間がセット内に入れないので，カメラと一緒にテレビカメラを取り付け，監督はこのテレビを見ながら演出を行ったそうだ。

この映画では木星が一つのキーポイントになっているが，この木星はジュピターマシンと呼ばれるトランブルがこの映画のために開発した装置で撮影された。

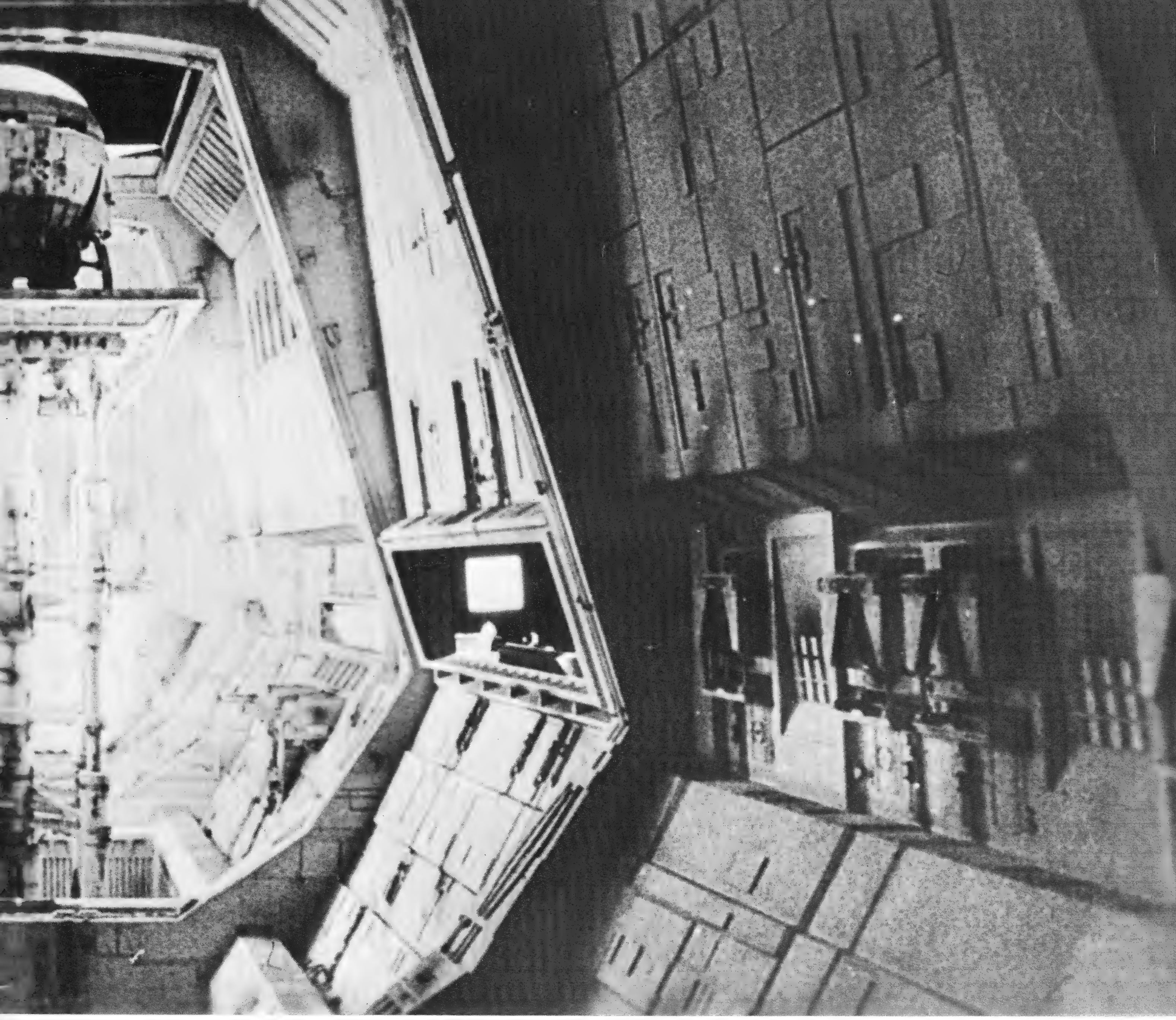
このシーンは最初は絵を使って撮影されていた。しかしこれでは立体感が乏しく問題になっていた。そこでトランブルが考えた装置では，円板の縁の部分に白い塗料を塗り，これを回転させると共に，木星の絵をスライドにしたものをこれに投影して撮影を行った。

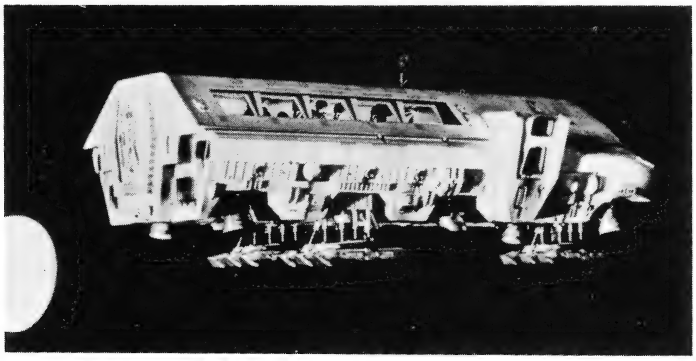
こうすればふくらみを持った面に投影されたものを撮影するので立体感が良く出るというわけだ。それなら最初から球形のスクリーンに投影すればいいじゃないかといわれそうだが，それではどうしても周囲の部分のピントが合わなくなってしまう。

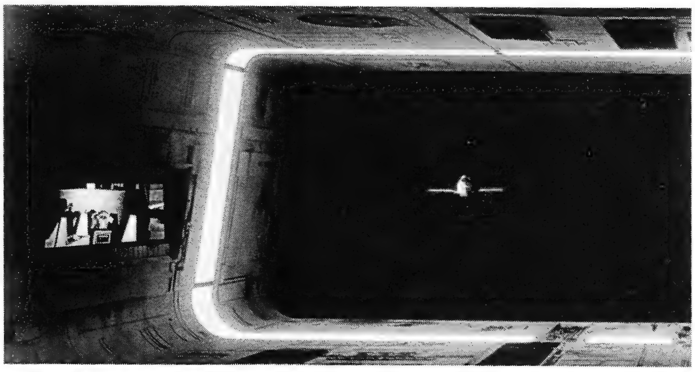
実際の装置では，円板の回転と一体にスライド映写機も回転され，円板の縁に対して常に正面から光が当るようにされ，さらに円板の回転に合せてスライドの絵の内容が少しずつ変るようにされている。

そして最後に登場するのが，スターゲートコリドーと呼ばれる光線の乱舞するシーンだ。

このシーンにはスリット・スキャン装置と呼ばれる撮影装置が使われた。この装置はフィルムの直前にごく細いスリットを置いた70ミリカメラと，裏側から極めて強い光で図形の投影されるスクリーンとから成っている。そしてカメラはスクリーンに対して14フィートの位置から5インチまで，スムースに移動できるようにされると共に，この移動に同調してスリットの位







置が移動するようにされている。
　この装置で撮影を行う場合には，まずカメラを14フィートの位置に後退させ，スリットをフィルムの中央にすると共に，写したい図形をスクリーンに投影する。そしてカメラを除々にスクリーンに近付けながら，スリットの位置をフィルムの端に向って移動させる。
　このようにして撮影すると，図形は画面の中央では14フィートの先にあり，端になるに従って手前に近付いてくることになる。こうして1コマが撮影され，次にカメラをまた14フィートの位置にすると共に，フィルムを1コマ送り，さらにスクリーンの図形をわずかにスリットの移動する方向に動かして同じ撮影を繰り返す。
　こうして撮影されたフィルムを連続してみると，あの手前に流れてくるように映像がみられるというわけだ。

　以上書いたように，この映画には1シーン1シーンに驚く程の手間と時間がかけられている。この映画が完成した後でトランブルは，「我々はこの映画で大いに勉強させてもらった。この経験はこの後の映画製作に大変役立つだろう。しかし，これと同じ事をもう一度やるのは不可能だ」と語っている。
　この映画は実に永久，不滅なのである。

STANLEY KUBRICK

監督・製作
スタンリー・キューブリック



キューブリックは1928年7月26日，医者の息子として生まれた。高校時代の望みはジャズ・ドラマーになる事で，今でも時々演奏をして楽しむ程のマニアである。

また，彼はカメラが好きで，16歳の時，ルーズベルト大統領の死を扱った写真が“ルック”に買いとられたこともある。17歳で高校を卒業すると同時に“ルック”誌にカメラマンとして入社した。彼は“ルック”に４年間勤めた。

数多い監督の中で彼ほどカメラ技術に造詣の深い人はなく「2001年宇宙の旅」での新しいアイディアの数々は，新しいカメラ技術に関する教科書といえる。

“ルック”に在社中,記録映画や“THE KILLER'S KISS”，“FEAR AND DESIRE”などの実験映画を製作した。

映画は多くの人々から称賛されたが，映画会社から口がかからなかった為，再び生活の為に一局25セントの賭チェスをして食費をかせいだ。

その頃，ジェームス・ハリスと知り合い，若い二人は協同で，「現金に体をはれ」(56)を発表して批評家の絶賛をあび，続いて，「突撃」(57)「ロリータ」(62)を製作した。その間，彼は「スパルタカス」(60)を監督している。

「博士の異常な愛情」は核戦争をテーマにしたコメディで,今まで作られたものの中で最も型破りな映画で,同年のニューヨーク批評家賞を獲得した。

キューブリックの作品にはいく分厭世的な傾向があり，彼自身も懐疑主義者といえよう。

パイロットの免許を持っているが飛んだ事はなく，人間の大量殺人兵器の製造に対する能力から見て，人類の将来に対して疑いをもっている。

アーサー・C・クラークと共同執筆した「2001年宇宙の旅」ではシナリオ作成に2400時間を費したといっている。

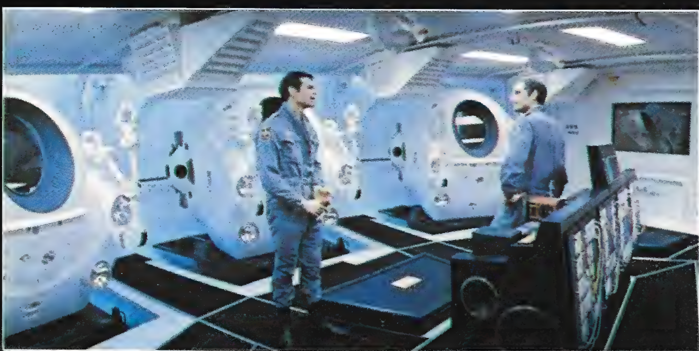
彼は，この映画を作るため，科学とS・Fに関するあらゆる本を読み，多くの科学者の意見を聞き，又特別に国家宇宙開発計画の科学者をコンサルタントとして招き映画の科学面の確実性を期した。

「2001年宇宙の旅」は芸術家が作った科学と空想の見事な結合作品といえよう。

ロンドンで「2001年宇宙の旅」のラッシュを見たジェームス・ハリスは“この映画はきっと映画を見終った後で観客が「この様な映画は今まで見た事がない。とても素晴しい」といえる唯一の映画になるだろう”と語った。

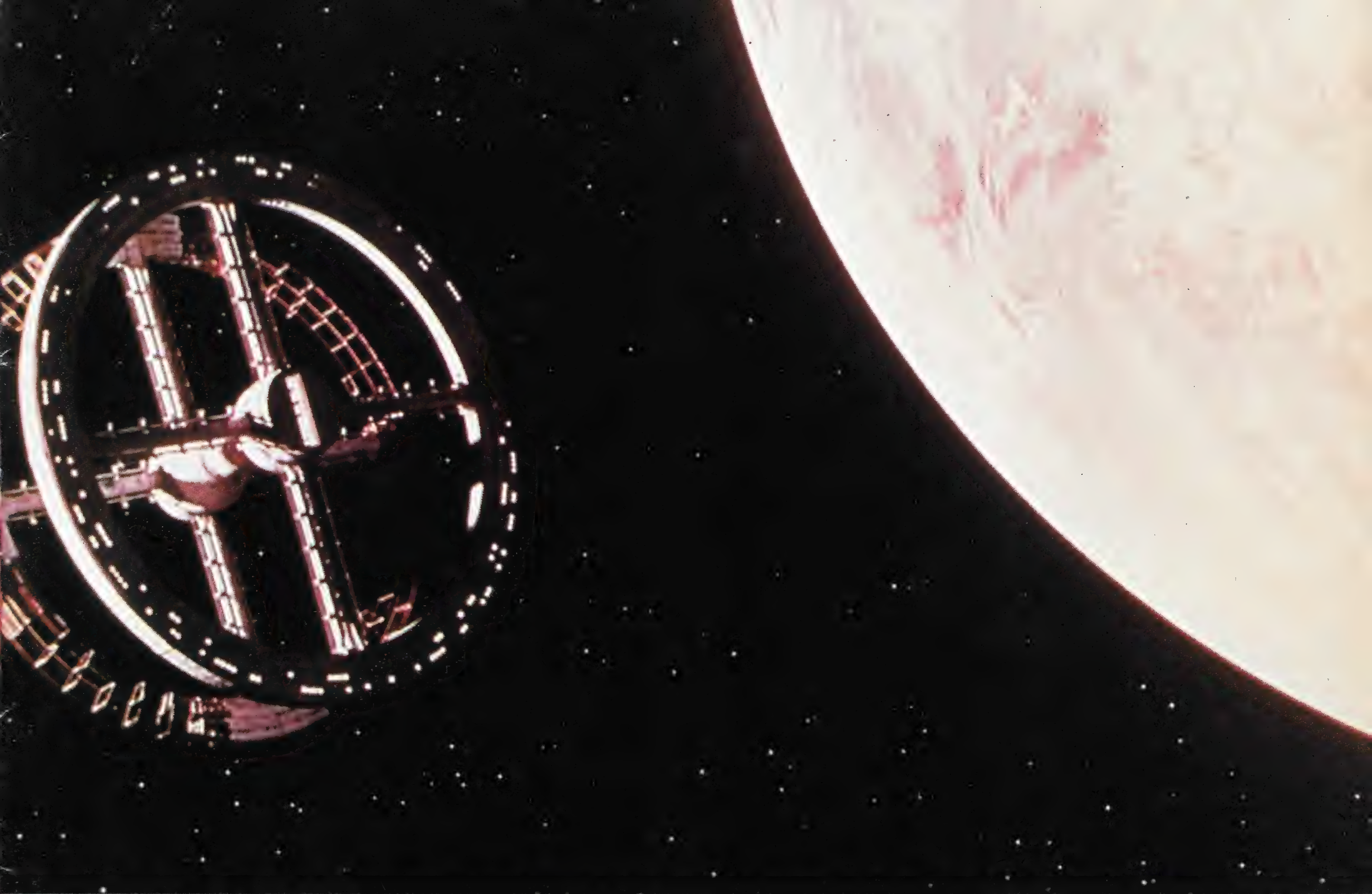
「2001年」以後には「時計じかけのオレンジ」「バリー・リンドン」がある。



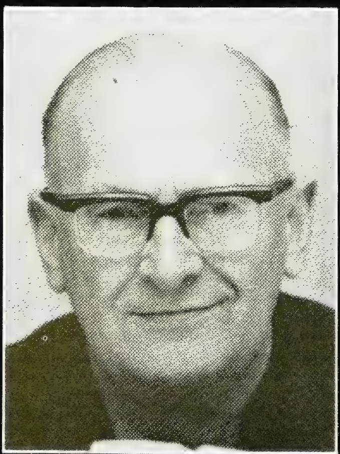








ARTHUR CHARLES CLARKE



脚本
アーサー・C・クラーク

世界S・F界の最高峰と目されている，アーサー・C・クラークは，1917年イギリスに生まれた。

イギリス・惑星間協会前会長，宇宙飛行アカデミー会員，イギリス宇宙飛行協会会員，その他，多くの科学団体の会員でもある。

彼の科学的事実と作家の“夢”を結合させるオ能は1930年3月，イギリス・サマセット州，マインヘッドの父の農場で過した少年の日，手に入れたアメリカの“アスタウンディング・ストーリーズ”を読んだ時から始まる。

クラーク少年の“アスタウンディング”の蔵書はまたたくまに増え，いつの間にか同じ系統の雑誌“ワンダー・アンド・アメージング”の二誌は全冊が揃っていた。

第二次大戦後，ロンドン大学のキングス・カレッジに入学。普通４年のコースをクラークは２年で物理及び数学科を最優秀の成績で卒業，更に大学院で高等数学と応用天文学を学んだ。

現在活躍している作家の中でクラーク程の科学的才能と経験を持っている人は少ない。

彼は1945年技術専門紙に通信衛星の概論とその建造の過程に関する精細な論文を書いた。“スプートニク”が人々を驚かせたのはそれから12年も後の事だった。

彼の論理，必然性，専門用語をさけた平易な文章は一般の人々を彼の作品を放映するテレビの前に釘付けにしてしまう。彼の作品が30ヵ国語に翻訳され，500万部も売れたのも容易にうなづける。

わが国で出版されたものには「火星の砂」，「幼年期の終り」「都市と星」，「海底牧場」，「宇宙文明論」，「渇きの海」など多数がある。

1965年“ライフ”に書いた通信衛星の記事は最優秀宇宙飛行記事として宇宙飛行作家協会賞を獲得した。

ここしばらくクラークの趣味はオーストラリアのグレート・バリアー・リーフと1956年以来居を構えているセイロン島沖での海底探険だが，決して彼は宇宙に関する興味を失っているわけではない。

日本に数回来日している親日家でもある。

●映画音楽の構成

この作品は既成の名曲，既存の名演奏のみによってBGMが構成されているという当時としては斬新な演出が行われ音楽ファンも十分楽しめる。

❶タイトル・バックの“序曲”としてプロローグ「人類の夜明け」のモチーフとして，リヒアルト・シュトラウス作曲『ツァラトゥストラはかく語りき』（カール・ベーム指揮，ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団演奏）

❷謎の黒石碑のテーマ音楽として，それが登場するたびに，ギョルギィ・リゲッティー作曲『ソプラノ・メゾソプラノ・二つの混声合唱と管弦楽のためのレクィエム』（フランシス・トラビス指揮，バイエルン放送交響楽団演奏）

❸旅客船オリオン号が宇宙ステーションに着くまでと，宇宙船エアリーズ号が月へ向かって飛び立つシーンに，ヨハン・シュトラウス作曲『美しく青きドナウ』（ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮，ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団演奏）

❹フロイド博士の月基地到着から，彼がムーンバスでティコ火口へ飛ぶシーンまで，②のリゲッティー作曲『永遠の光を』（クリトウス・ゴットヴァルト指揮，シュトットガルト・スコラ・カントルム演奏）

❺ボウマン船長らが宇宙船ディスカバリー号の中で運動や食事をしている船内生活の伴奏に，アラム・ハチャトリアン作曲『舞踊組曲・カヤーヌ』の《アダージオ》（ゲンナディー・ロジェストヴェンスキー指揮，レニングラード・フィルハーモニー管弦楽団演奏）

❻木星圏への旅の光彩乱舞のサイケデリック・シーンに於ける宇宙サウンドの音楽は，②④のリゲッティー作曲の『無限の宇宙』（エルネスト・ブール指揮，南西ドイツ放送管弦楽団・演奏）

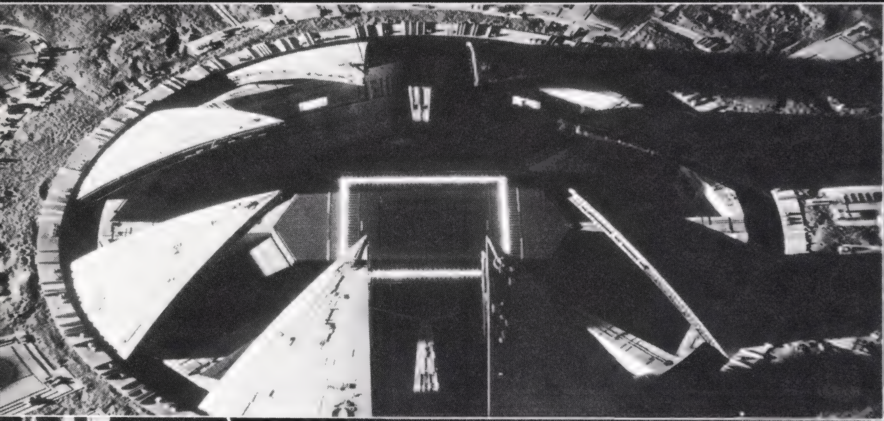
❼ラストの超人類の誕生の場面に，再び序曲と同じ『ツァラトゥストラはかく語りき』が演奏され以上の曲名・指揮者・楽団名が延々と紹介されるエンド・タイトルの伴奏に………

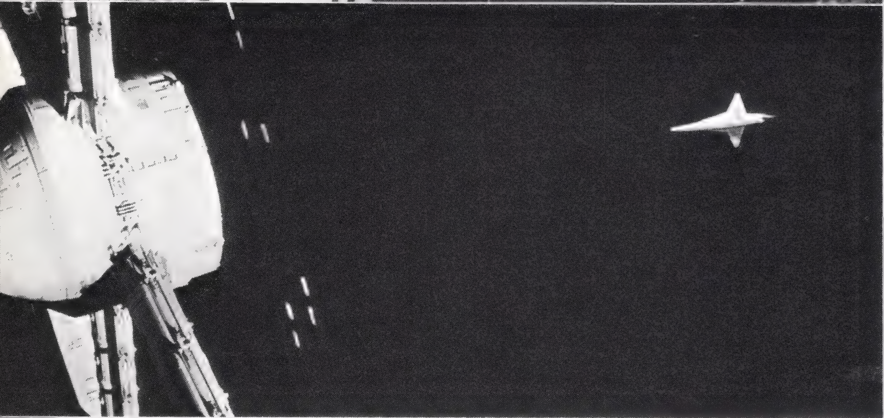
❽前記の『美しく青きドナウ』の曲の後半の部分が演奏される。

（サントラ盤MGMレコード）

●驚くべきセット

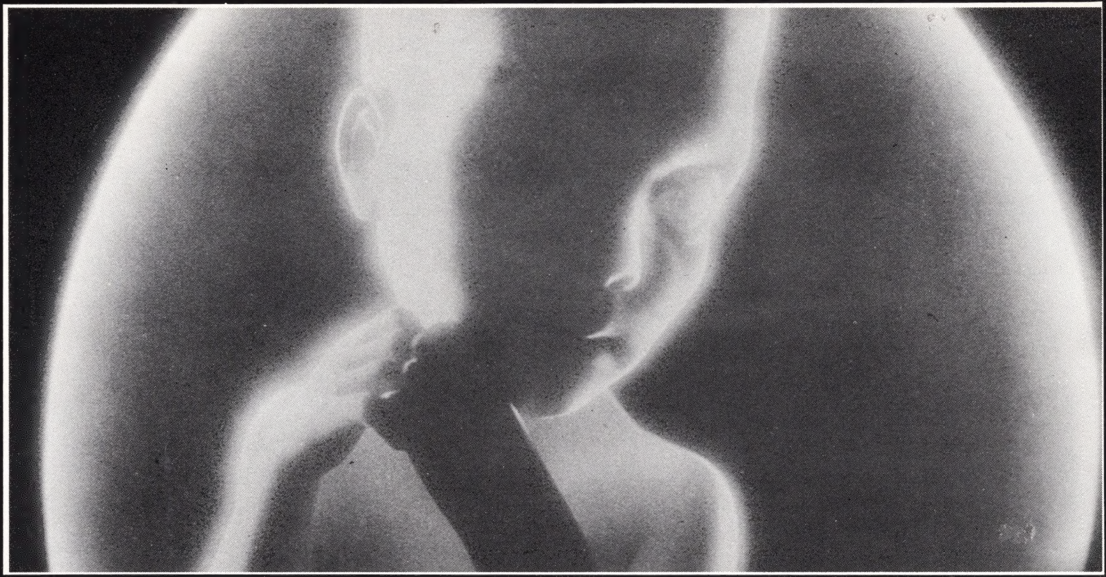
『2001年宇宙の旅』のすばらしいセットを作るために，美術監督トニー・マスターズは，デザイナーと製図工を35人集めた。これは未来のことであるが，科学的空想というよりは，科学的真実に基づいて作られたデザインが使用されている。21世紀初頭の地球，巨大な宇宙ステーション，地球と月の間の宇宙船，月，太陽系外を目指す遊星間宇宙船などを舞台に起こる劇的場面のために，18の大きなセットが組み立てられた。有名なビッカース・アームストロング会社が，この映画のために設計し，建設した重要な道具は，高さ36フィート，重さ38トンに達した。撮影に必要な動力を供給するため，トラック何台分もの機械が，撮影所の敷地に設置された。この映画の撮影監督は，「ジンギス・カン」「ベケット」ローレンス・オリビエの「オセロ」を手がけたジョフリー・アンスワースである。





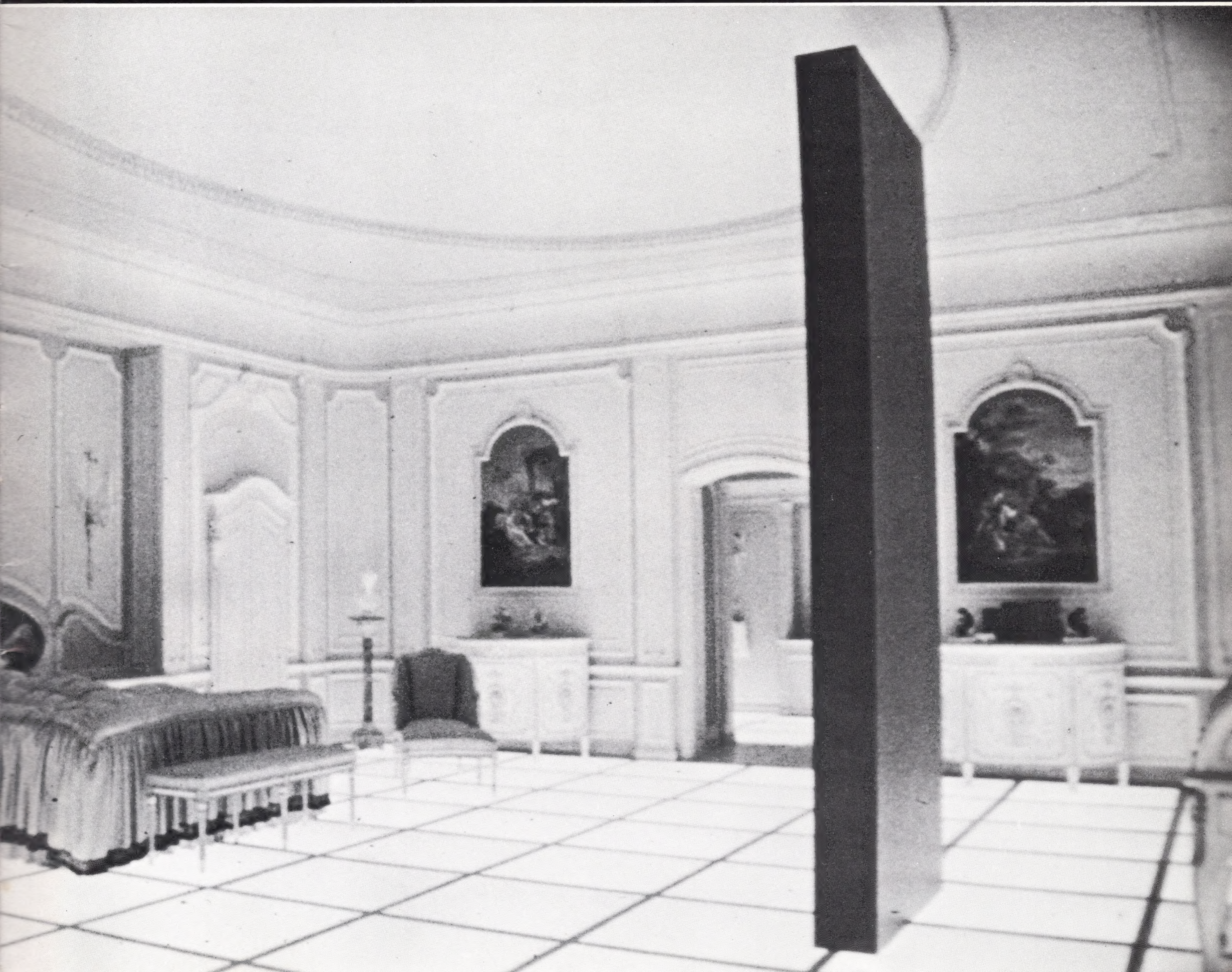


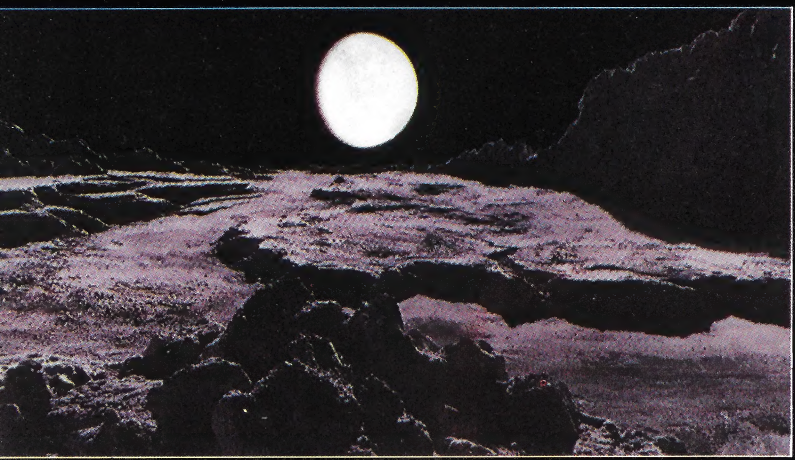




●技術顧問

この映画を科学技術的に正確にするため，キューブリック監督は，アメリカ航空宇宙局の多くの科学者，アメリカおよびイギリスの主要な科学研究所や大学と密接な提携をした。撮影中を通じて三人の一流科学者が技術顧問としてつき添った。それは元陸軍弾道ミサイル部のフレドリック・I・オーダウェイとハリー・H・C・レンジ，元航空宇宙局の宇宙飛行センター勤務で，当時アラバマ州ハンツビルのジェネラル宇宙飛行研究会社のジョージ・C・マーシャルの三人である。オーダウェイは，宇宙場面に真実さを与える責任を持っていた。この宇宙場面のために，世界一流の特殊効果技師が多数動員された。レンジは，映画に現われる宇宙船の外部と内部のデザインと，各種の宇宙時代の装置，部品のデザインを担当するチームの一員だった。





MGM PRESENTS A STANLEY KUBRICK PRODUCTION

2001: a space odyssey

Super Panavision® and Metrocolor

The Cast

Keir Dullea . . . . *Bowman*
Gary Lockwood . . . . *Poole*

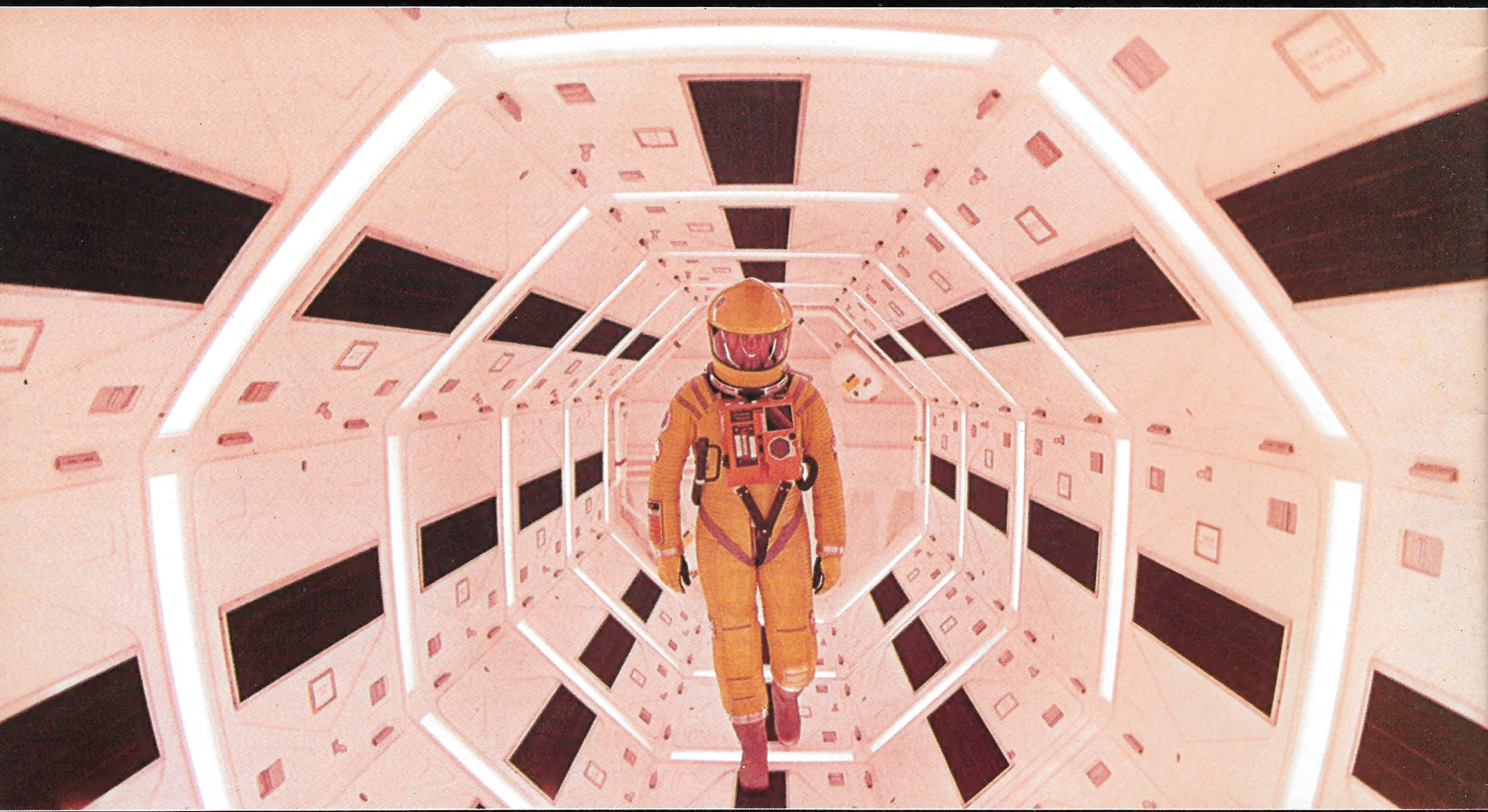
William Sylvester . . . . *Dr. Heywood Floyd*
Daniel Richter . . . . *Moonwatcher*
Douglas Rain . . . . *Hal 9000*
Leonard Rossiter . . . . *Smyslov*
Margaret Tyzack . . . . *Elena*
Robert Beatty . . . . *Halvorsen*
Sean Sullivan . . . . *Michaels*
Frank Miller . . . . *Mission Controller*

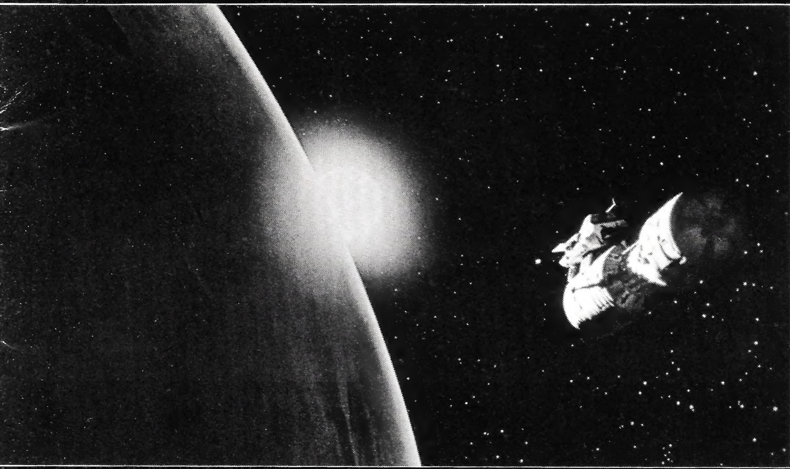
The Production

Directed and produced by . . . . Stanley Kubrick
Screenplay by . . . . . Stanley Kubrick, Arthur C. Clarke
Director of Photography . . . . Geoffrey Unsworth
Additional Photography . . . . John Alcott
Production Design . . . . Tony Masters, Harry Lange, Ernie Archer
Editor . . . . Ray Lovejoy

All Special Photographic Effects Designed and Directed by
MR. KUBRICK

Special effects supervisors . . . . Wally Veevers, Douglas Trumbull, Con Pederson, Tom Howard
Wardrobe . . . . Hardy Amies





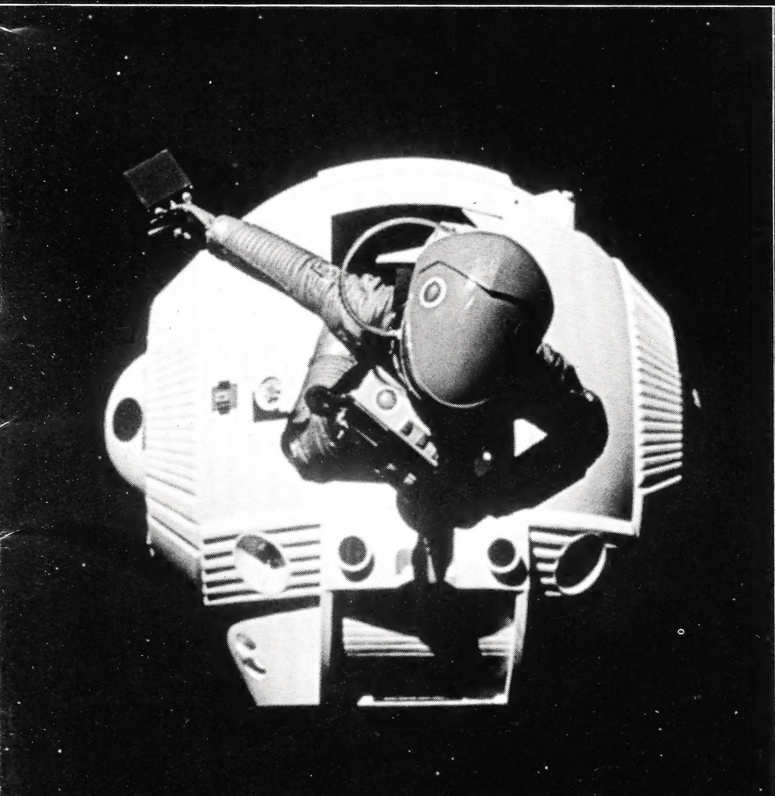


定価 300円

昭和53年10月27日印刷
昭和53年10月28日発行

発行所 東京都千代田区有楽町1－2－1 東宝株式会社事業部
発行者 東京都千代田区有楽町1－2－1 大橋雄吉

印刷所 東京都港区芝2－1－28 成旺印刷株式会社



2001: a space odyssey

